

# 別府溝部学園短期大学紀要

第 45 号

令和 4 年 3 月

No. 45

March 2022

## 目 次

### 報 告

介護労働の現状と業務効率化への取り組み

—介護事業所の介護サービスの質の向上のために—

..... 溝部佳子・棹 友美 ..... 3

別府溝部学園短期大学自己点検・評価についての考察

—令和2年度— ～学生による授業評価～

..... 牧 昌生 ..... 11

総合的な学習の時間で育む資質・能力に関する一考察

—小中学校学習指導要領改訂と実施状況等を通して—

..... 三浦徹夫 ..... 39

言語景観の視点から読み解く多言語による情報発信

—おんせん県おおいたにおける事例分析—

..... 里中玉佳・清水 毅・安達美和子 ..... 45

とよ ななせ がき  
「豊の七瀬柿」の普及啓発のための加工品販売と食育活動についての報告（第2報）

..... 土谷知子・河野拓郎 ..... 65

幼児の食育に対する栄養士・管理栄養士・栄養教諭の役割に関する考察

—別府市の食育推進計画がSDGsへ繋がるために—

..... 江島陽子・中嶋加代子 ..... 75

# 別府溝部学園短期大学紀要

第 45 号 令和 4 年 3 月 No. 45 March 2022

---



# 介護労働の現状と業務効率化への取り組み —介護事業所の介護サービスの質の向上のために—

溝部 佳子・棹 友美

Current status of nursing care labor and  
initiatives to improve work efficiency

—To improve the quality of nursing care services at nursing care offices—

MIZOBE Yoshiko, SAO Tomomi

## I. はじめに

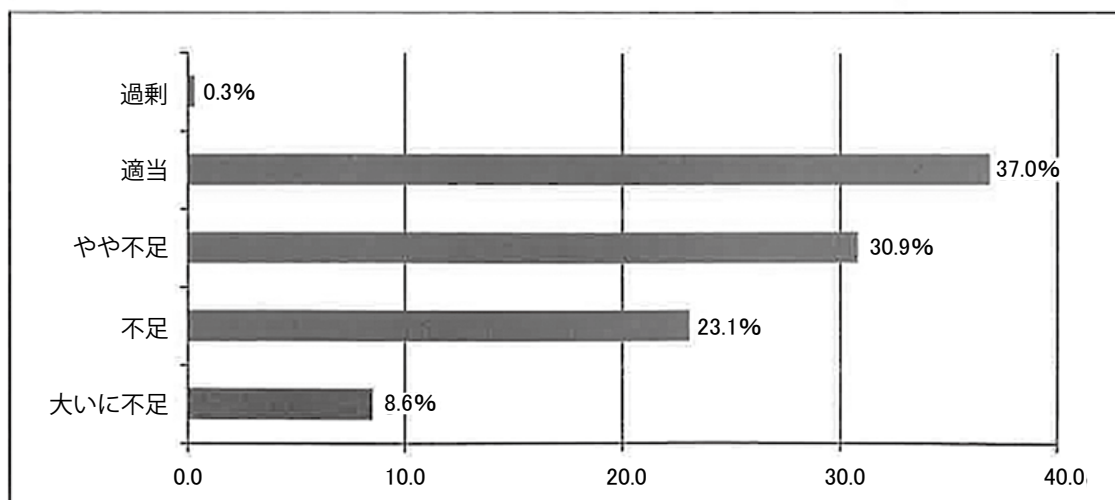
平成28年度介護労働実態調査結果からみる介護労働の現状として、「介護事業所を取り巻く課題」と「介護労働者の意識」から論じることとする。

### 1. 「介護事業所を取り巻く課題」

介護業界は、他の産業に比べて有効求人倍率が非常に高く、人手が足りていない現状であるが、厚生労働省における現状のシナリオでも団塊の世代が後期高齢者となる2025年には、約38万人の介護労働者が不足すると試算されている。

介護労働安定センターでは、平成14年より全国の介護事業所を対象に介護労働における意識を調査する介護労働実態調査を実施し、平成28年度に実施した調査においては、介護サービスを実施する全国8,993事業所から回答を得た。

「介護職員の過不足の状況」(図1)について質問したところ、不足感(大いに不足+不足+やや不足)が62.6%、「適当」が37.0%と、事業所の意識としても人手不足感は深刻化していることがうかがえた。



資料出所：(公財)介護労働安定センター

図1 介護職員の過不足の状況

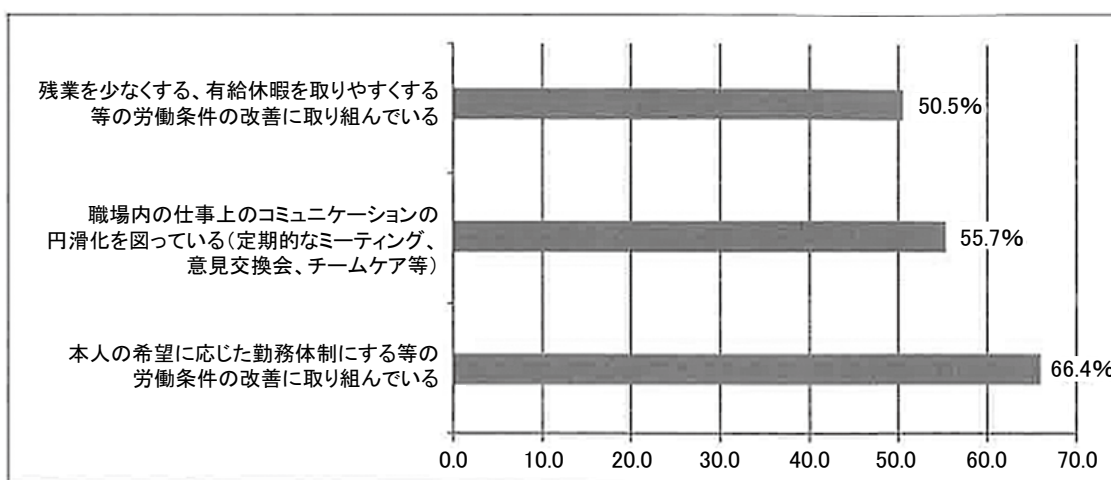
では、こうした深刻化する人手不足に対して介護事業所はどのような取り組みを行っているのでしょうか。同調査において「早期離職防止や定着促進のための方策」（図2）についての質問に対し、「労働時間の希望を聞いている」、「職場内の仕事上のコミュニケーションの円滑化を図っている」、「賃金・労働時間等の労働条件を改善している」が上位を占めており、介護事業所においても雇用管理改善を図る等の対策を講じていることが分かった。

## 2. 「介護労働者の意識」

現場で働く介護労働者は、現在の職場環境についてどのように感じているのでしょうか。介護労働者の意識調査では、全国の介護保険サービス事業を実施する事業所の中から一事業所あたり3名を上限とし、21,661人の回答を得た。

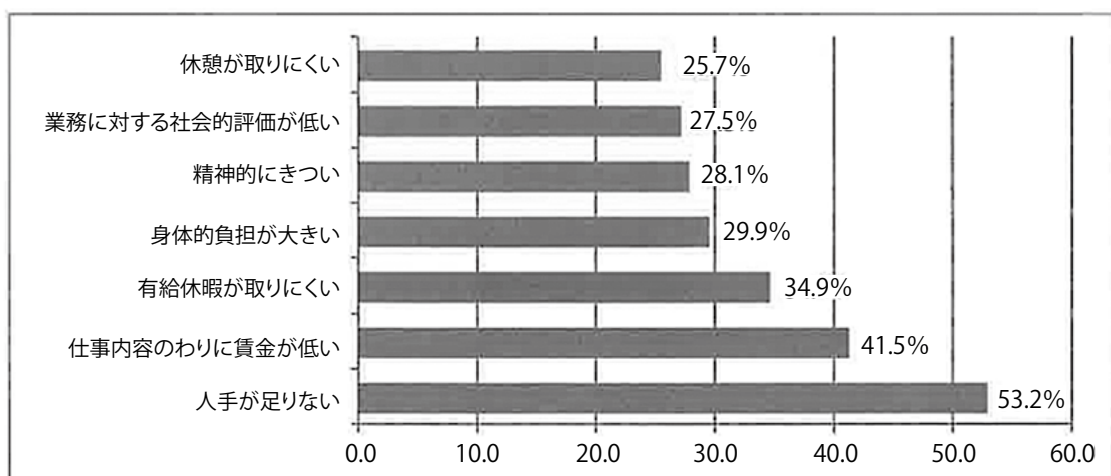
その中で、「労働条件の悩み、不安、不満等」（図3）について、調査したところ「人手が足りない」が最も多く、「仕事内容の割に賃金が低い」、「有給休暇が取りにくい」、「身体的負担が大きい」が続いており、労働環境に対する不満が上位を占めていた。

こうした労働条件の改善が人材の確保と定着



資料出所：(公財)介護労働安定センター

図2 早期離職防止や定着促進のための方策（複数回答、上位3回答）



資料出所：(公財)介護労働安定センター

図3 労働条件の悩み、不安、不満等（複数回答、上位7回答）

のためには欠かせないポイントとなっていることが分かった。

以上から、業務効率化への取り組みを実施することにした。

## II. 目的

大分県委託事業「介護サービスクオリティ向上事業」においては、大分県下の介護老人福祉施設2施設、介護老人保健施設1施設の計3施設を対象に取り組みを行った。

介護事業所の業務効率化を進めるにあたり、福祉分野の専門家等のアドバイザーを介護事業所に派遣し、介護事業所の業務内容の調査・分析を行い、業務のうち効率化すべき点を抽出して介護事業所の状況に合わせた様々な業務改善の提案、計画を立てて取り組みを行った。

今回、事業を実施するにあたり、介護労働安定センターが作成した「アンケート調査票」を活用した。アンケート調査票は、管理者、職員から回答を得て、介護事業所の改善課題等の抽出の参考とした。

また、改善に取り組む前、後と2回実施をして、

効果の比較、分析を行った。

なお、管理者へは、管理者から見た介護職員についての設問とした。

## III. 本論

事例

介護職員一人ひとりの力を信じて

ートップダウンからボトムアップへー

- ・事業所名 特別養護老人ホーム〇〇〇〇園
- ・事業開始 平成27年
- ・入所定員 29人
- ・職員数 33人（うち介護職員 24人）
- ・施設区分 ユニット型地域密着型介護老人福祉施設

### 1. 課題

事前の「意識調査アンケート」結果から、下記の2点が抽出された。

- 1) 介護技術の統一化（標準化）が図れていない施設として、介護技術の統一（標準化）を目標に掲げているが、開設時より特養で新人職員に

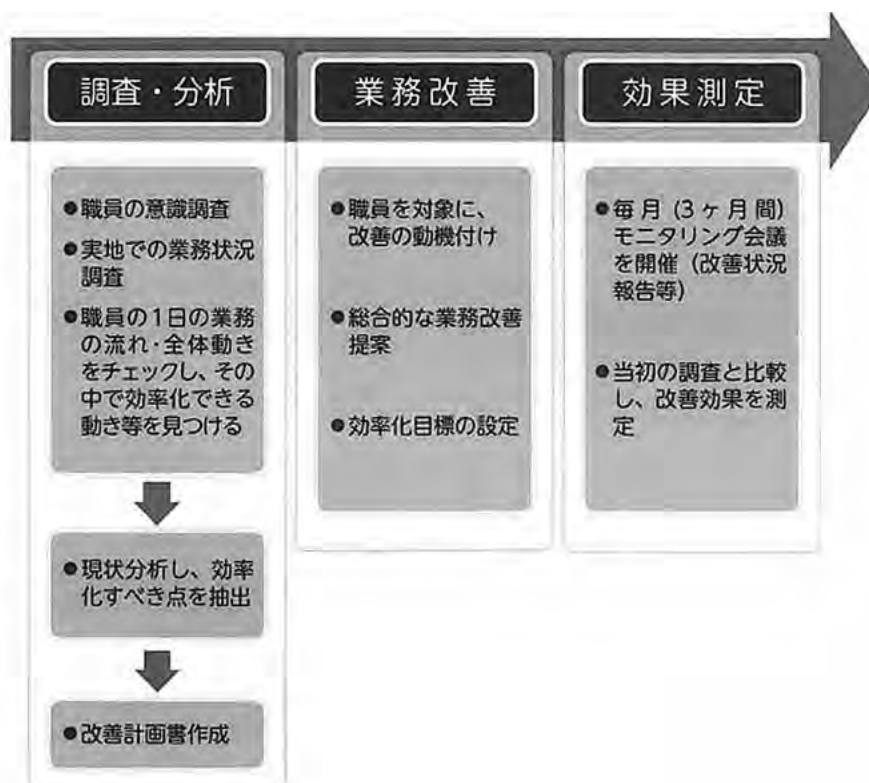


図4 取り組みの概念図

配布していた「介護マニュアル」は、法人内ケアハウス対応のマニュアルであることが、本取り組みの支援にあたり判明した。

また、マニュアルに記載の介護技術等についても、入職時に習得していることを前提に記述されているため、初めて介護の仕事に就く職員には理解しづらく、あまり活用されていないという事実も判明した。

そのため、現場では、利用者の特徴にあった介護技術等を、その都度、その場で決めている状況であり、介護技術の統一化が図れていないことがうかがえた。

## 2) 現場からの意見を施設運営に反映する仕組みがなく、介護職員の士気が上がらない

現場側からの意見や改善点の抽出場所がないため、現場からの意見が施設運営に反映できていない状況が続いていた。原因としては、即存の会議の在り方では、管理者側（施設長・課長・リーダー等）から職員に対し、決まりごとや考えをそのままトップダウンすることが多く、介護職員にそのエビデンス（根拠）が明確に伝えられていない状況であった。そのため、職員はその指示の真意を理解することなく日々の業務を実施していた。

以上の大項目2点に取り組む中で、更なる中項目として業務内容の改善や就業時間の変更、そして、新たな会議の創設等の課題が抽出された。

## 2. 業務改善の内容

### 1) 介護技術の統一化に向けて

特養独自の「介護マニュアル」の作成に向け、「マニュアル作成委員会」を発足。

委員会は、フロアリーダーのほか、介護課長や、生活相談員で構成し、マニュアルの項目毎に役割を分担した。

また、マニュアル作成と合わせ、「新人職員用のチェックリスト」の内容をどのフロアにも共通となるベーシックな内容に見直し、新人職員でも1ヵ月で達成できる内容とした。

### 2) 職員の意見の抽出場所としての新たな会議体系の創設

会議の在り方を見直し、ボトムアップの仕組みを構築した（図4）。

また、ユニット会議の中では業務の改善点他、個別ケアについても取り扱い、会議以外でも必要に応じてカンファレンスを行うこととした。

### 3) 夜勤帯の勤務時間の変更（ボトムアップにより新たに派生した取り組み）

現場の声をもとに、就業時間を見直し、これまで22:00～翌10:00（休憩4時間）であった夜勤帯の勤務時間を、23:00～翌8:00（休憩1時間）に変更した。1ヵ月試行したうえで検証し、改善点があれば柔軟に対応することにした。

### 4) 外部・内部研修の強化（職員教育という観点から新たに派生した取り組み）

外部・内部研修の開催頻度を増やし、介護職員の資質の向上を図る。

内部研修では、おむつ交換や陰洗等のフロアでの介護技術等の統一化を図るために、定期的を実施する。

外部研修に関しては、職員配置の関係で一度に多くの職員の参加が困難なため、今後はEラーニングの導入も視野に入れて検討することにした。

### 5) 勤務表作成について（ボトムアップにより新たに派生した取り組み）

これまで勤務表の作成は、介護課長が一人で行っていたが、各フロアリーダーが作成することで、より現場の状況（職員の熟練度等）に応じたシフトを組むことが可能となった。

## 3. 取り組みのポイント

### 1) 介護技術の統一化に向けて

介護福祉士試験の受験準備等のため、取り組みが遅々としてなかなか進まなかったが、委員会という形を取ることで責任の所在やいつまでに誰と相談しながら進めていけばいいのか等が具体的に明確となり、作業に取り掛かりやすい

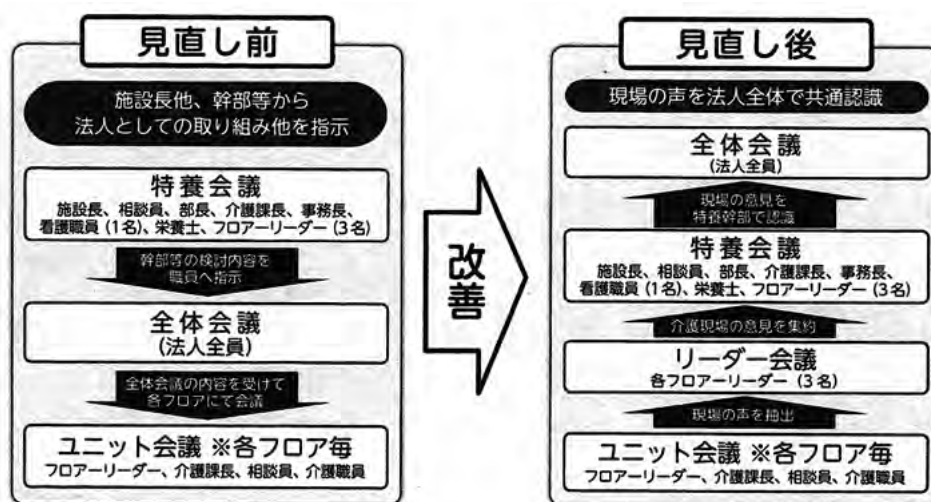


図5 見直し前と見直し後

環境を創ることで効率化が図れた。

## 2) 職員の意見の抽出場所としての新たな会議体系の創設

議事録作成の際の書式を各フロアー同じものとし、記録のし易さ、見易さ等に工夫をするようにした。意見は、その場で解決できるもの、上位の会議に持ち込むものと明確に選別して意見が途中で頓挫したり、消失しないように心掛けるように促した。

## 3) 夜勤帯の勤務時間の変更

夜勤職員の勤務時間を変更したほか、朝食時の人員体制を充実するために、その時間にパート職員を新たに配置した。更に今後は、夜勤シフトに各フロアーリーダーは極力入らない方向にもっていくことで、日勤者の急な体調不良による欠勤時に柔軟に対応できるようになるのではないかと提案した。

## 4) 外部・内部研修の強化

研修の頻度を、2週間に1回など、出来る範囲から取り組むことを示した。

## IV. 結果

### 1. 介護技術の統一化に向けて

リーダー会議・ユニット会議の実施や外部・内部研修を行うことにより、介護技術の統一化への取り組みが出来てきた（図6）。

### 2. 職員の意見の抽出場所としての新たな会議体系の創設

ユニット会議を行うことで、職員一人ひとりの意見が大事にされる環境が整うことで、多くの業務改善等の意見が出るようになり、効率的に業務にあたる事ができ、休憩時間の取得率も向上した（図7）。

また、今後も多くのボトムアップが期待される。

### 3. 夜勤帯の勤務時間の変更

変更により、上記の改善が見られたほか、今まで夜勤が出来なかった職員も夜勤が出来る可能性が出てきた（図8）。

## V. アドバイザーの感想

今回の特別養護老人ホーム〇〇〇〇園との関わりは、当初、第三者がアドバイザーとしてどこ

まで支援ができるのか不安であった。しかし、早い段階から、ラ・ポール（信頼関係）の関係性が構築できた。その最大の理由は、第一回会議の際に、忌憚なく互いに本音で話し合うことができたことが、大いになる要因であったと考える（第二回以降の施設長の出席依頼等）。

それには、施設の皆様方がよりよい環境を創りたい、そして、それを利用者様の介護に反映させたいという強い意図と情熱が、アドバイザーに伝わったこと。そして、そのために互いに、利用者様に喜ばれる介護をするために「何が必要か?」「改善点は何か?」等を共に模索するという共通項を見出せたことが、課題から取り組みへ、そして結果に繋がられたのではないかと考える。私が、今回の取り組みの中で最も力を入れた

かったことは、介護職員のソフト面の支援、つまり、心の持ちよりの支援であった。取り組みの過程で施設の皆様方は、徐々にやる気が高まり目標値を高く設定するがゆえに、最初は会議の度にマイナス面を指摘する発言が多々見られた。

ところが、介護職員の皆様方がアドバイザーから「この施設の売りは何ですか?」、「よい点は何ですか?」から始まり、しっかりと自分達の施設の肯定的な面を見つめ、認識する機会を得たことで、現実的に即した目標設定に修正された。これにより、介護職員の皆様に達成感を持っていただくことができ、意欲づくりやポジティブ発言に寄与できたのではないかと考える。

以上から、当初、管理者と職員との間にあった、認識や意識の不一致も多少なりとも是正で

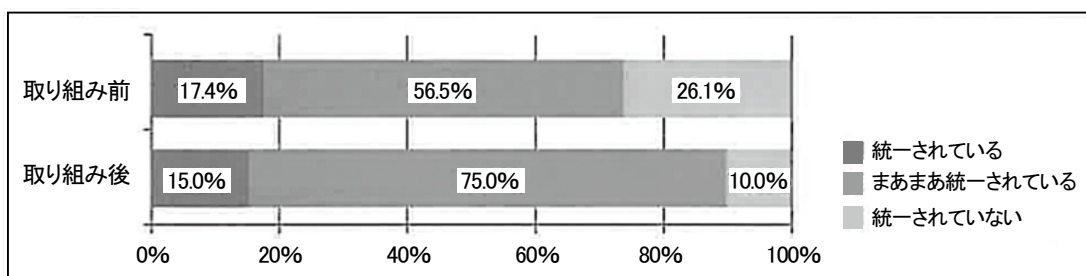


図6 あなたの行っている利用者ケアは、職場内で統一されていますか

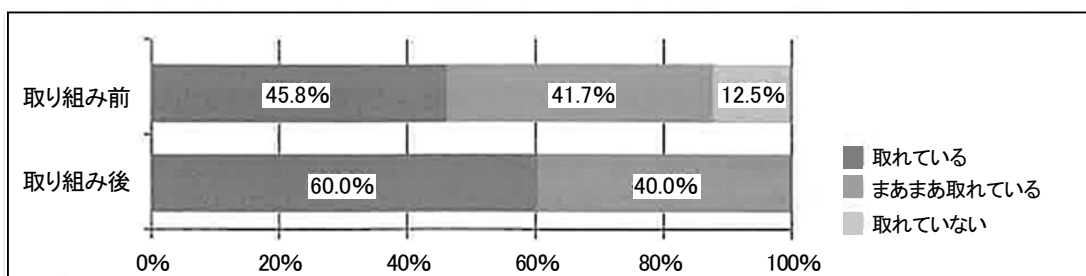


図7 アンケート問1「1日の業務において休憩時間は取れていますか」

シフト	勤務時間	休憩
①	7:00~16:00	1H
②	10:00~19:00	1H
③	13:00~22:00	1H
④	22:00~10:00	4H

変更

シフト	勤務時間	休憩
①	7:00~16:00	1H
②	10:00~19:00	1H
③	14:00~23:00	1H
④	23:00~8:00	1H

図8 勤務時間表

きたのではないだろうか。

## VI. 考察

今回の事業所は、平成27年に開設した3年に満たない未熟な施設であった。業務システムをはじめ介護業務における介護スキルもはなはだ心許ない部分が多々あり、業務改善、就労環境の整備や介護スキルの標準化等々、多くの課題を抱えていた。

しかし、今回の支援をさせていただき、今まで「取り組まなければ」と思いながらそのままに

なっていた課題に取り組むことができたことは、非常に大きな進歩だったと感じている。また、課題への取り組み方や目標設定についての具体的な考え方の指針を得ることが出来たことが示されたケースであった。今後も職員一人ひとりの力を信じて更なる「介護サービスのクオリティ向上」に向けて継続的に支援していきたいと考えている。

管理者は勿論、リーダー他職員一同、多方面で業務の効率化とともに働きやすい職場環境への取り組みができたことに感謝の意が表された。

[資料]

アンケート調査票			
所属 (役職)	( )	氏名	

■あなたの労働環境面に関する事について伺います※該当するものに○をつけてください

問1	1日の業務において、休憩時間は取れていますか ①取れている      ②まあまあ取れている      ③取れていない
問2	問1で②「まあまあ取れている」と答えた方に伺います。 休憩が取れないときの理由を教えてください。
問3	問1で③「取れていない」と答えた方に伺います。 休憩が取れない理由を教えてください。
問4	1週間あたりの残業は何時間ですか ①1時間以内      ②1～3時間      ③4～6時間      ④7時間以上      ⑤なし
問5	問4で①～④と答えた方に伺います。 残業の理由について教えてください (複数回答可) ①記録等の書類作成      ②利用者の介護      ③その他 ( )
問6	通常の介護業務において、どのようなストレスを感じているか教えてください (複数回答可) ①利用者への対応      ②利用者家族への対応      ③職員との人間関係      ④ストレスは感じていない
問7	職場全体において整理・整頓は出来ていると感じますか ①出来ている      ②まあまあ出来ている      ③出来ていない
問8	職場全体における整理・整頓は、利用者ケア等の介護面において重要と考えますか ①重要である      ②まあまあ重要である      ③重要でない
問9	介護技術を展開するうえで、あなた自身の体の保護をするために工夫していることはありますか (例：移乗の際にスライディングボードを使用、腰を保護するための固定ベルトを使用 など) ①常に工夫している      ②時々工夫している      ③工夫していない
問10	問9で③「工夫していない」と答えた方に伺います。 その理由を教えてください (複数回答可) ①工夫の仕方がわからない      ②工夫する道具がない      ③工夫することに必要性を感じない

介護労働の現状と業務効率化への取り組み

■利用者のケアに関して伺います

問 11	介護の仕事は楽しいと感じますか ①楽しい ②まあまあ楽しい ③楽しくない ④どちらともいえない
問 12	あなたの行っている利用者ケアは、職場内で統一されていますか ①統一されている ②おおむね統一されている ③統一されていない
問 13	利用者ケアの統一は必要と感じますか ①必要である ②まあまあ必要である ③必要と感じない
問 14	問 13 で①「必要である」と答えた方に伺います。その理由を教えてください
問 15	利用者ケアにおいて、他の職種の意見を集約しケアに反映させていますか ①反映させている ②まあまあ反映させている ③反映させていない
問 16	問 15 で①「反映させている」と答えた方に伺います。 その方法について教えてください（複数回答可） ①ケア会議等での直接的な意見集約 ②第三者（ケアマネ等）による個別的な意見集約 ③それぞれの職種の長による意見集約 ④その他（ ）
問 17	多職種とのスムーズな連携は出来ていますか ①出来ている ②まあまあ出来ている ③出来ていない
問 18	問 17 で③「出来ていない」と答えた方に伺います。 その理由を教えてください（複数回答可） ①ケア者ケアへの視点が違うから ②自分が相手の専門性を理解していない ③日常のコミュニケーション不足 ④多職種連携の必要性を感じない ⑤その他（ ）

■連絡・相談・報告等の組織体制について伺います

問 19	業務上で生じた様々な問題について、相談できる体制はありますか ①ある ②ない ③どちらともいえない
問 20	問 19 で①「ある」と答えた方に伺います。それはどなたですか ①直属の上司 ②直属を超えた上司 ③同僚 ④状況に応じて誰にでも相談できる
問 21	あなたは業務における何らかの提案・企画を行ったことがありますか ①ある ②ない
問 22	問 21 で①「ある」と答えた方に伺います。 提案・企画を出しやすい雰囲気でしたか ①出しやすい雰囲気である ②出しにくい雰囲気である ③どちらともいえない
問 23	問 21 で②「ない」と答えた方に伺います。 その理由を教えてください（複数回答可） ①ケア者ケアへの視点が違うから ②自分が相手の専門性を理解していない ③日常のコミュニケーション不足 ④多職種連携の必要性を感じない ⑤その他（ ）
問 24	業務上における諸問題を解決するための上司からの指示に納得できていますか ①納得できている ②時に納得できないこともあるが、おおむね納得できる ③時に納得できることもあるが、おおむね納得できない ④納得できない
問 25	問 24 で①「納得できている」以外で答えた方に伺います。 その理由を教えてください（複数回答可） ①指示内容について説明が不十分 ②指示内容が的確でない ③上司とのコミュニケーション不足 ④自分自身

# 別府溝部学園短期大学自己点検・評価についての考察

## —令和2年度—

### ～学生による授業評価～

牧 昌 生

The Report of the 2020 Self-Study and Evaluation at  
Beppu Mizobe Gakuen College

MAKI Masao

#### はじめに

学生による授業の評価について別府溝部学園短期大学では、平成5年度から自己点検評価委員会を発足させて検討を行ってきた。平成12年度からは全教科(専任・非常勤講師を問わない)を対象として、マークシート方式で調査を行ってきた。また、平成17年度からは学内LANを利用したWebにより、そして平成25年度からはスマートホン等を利用して学外からもWebによる全学生による授業評価を行ってきている。

学生の入力データの結果を教科毎に各教員に、その評価情報・結果が提供され、その分析を個々に行い授業の改善・工夫の努力が行われ、学生の受講意識、理解度等の向上への対策がなされてきている。本学の建学の精神である「自立・自活できる人材の育成」をめざし、各授業担当者が学生の琴線にふれるべく常に創意工夫を凝らした授業を創造している。

中央教育審議会は「教育の質」の確保・向上を高等教育機関に求めている。教員が授業を行うにあたり、多様な学生のニーズに応える教育を創造し提供し続けなければならない。

現実に、大学・短期大学は既に全入時代を迎え、多様な学生を受け入れてきている。向学心・向上心が旺盛な学生ばかりではない。目的意識が希薄な学生も入学してきている。

このような中、教員は学生の学力や意識、受講

態度、理解力等を的確に把握し、その状況に応じて授業内容・方法を改善して行かなければならない。しかし、教員の一方的授業分析では、誤った判断をしている可能性は否定できない。そのため、各教員の授業について、受講している学生からの情報が必要になってくる。平成12年度以降、学期毎に授業の改善を行ってきた。PDCAサイクルを廻す努力を進めてきたが、実態として改善が進んでいるかの検証を行っていく必要がある。

そこで、令和2年度の全学科、全開講科目に対する学生による授業評価の結果について比較検討を行った。

#### I. 調査内容および方法

令和2年度の「学生による授業評価」は、本学の学内LANおよびWebでの「デジタルキャンパス」を利用したシステムでの評価法により、下記の10項目(Q1～Q10)の評価項目について実施した。平成29年度より学力の三要素の達成度(Q11～Q13)についても評価をすることとした。(表1)。「教員による自己評価」も上記と同様に行った。

表1 学生による点検項目

Q1	この授業はわかりやすかった
Q2	学習内容に興味や関心が持てた
Q3	学習内容の分量は適切だった
Q4	教員の教え方に工夫が感じられた
Q5	教員は熱心に教えていた
Q6	授業中どの学生にも公平に接していた
Q7	いつも集中して聴けた
Q8	私語をつつしんだ
Q9	遅刻、欠席がないよう心がけた
Q10	意欲的に取り組んだ
Q11	知識・技能が身についた
Q12	主体性・意欲が身についた
Q13	就業力・協働が身についた

教員による自己評価も従来通り下記の10項目で行った(表2)。

表2 教員による自己評価

Q1	学生は授業を理解した
Q2	授業の事前準備は、十分おこなった
Q3	学生の興味・関心を喚起するように心がけた
Q4	各種教材(視聴覚機器・教科書等)を有効に活用した
Q5	授業の開始・終了時刻を守った
Q6	授業中どの学生にも公平に接した
Q7	出欠確認を適切におこなった
Q8	授業目的を達成した
Q9	授業要項(シラバス)の記載内容は現状のままでよい
Q10	学生のことが理解できた

令和2年度授業評価として、表1のQ1からQ13の質問に対し、下表のとおり5段階で評価させた。また、全学科の集計値(表3及び表4)を各評価項目について、肯定的評価及び否定的評価に分類し、図1及び図2のグラフで示した。

1	とてもそう思う	肯定的評価
2	だいたいそう思う	
3	どちらとも言えない	否定的評価
4	あまりそう思わない	
5	まったくそう思わない	

## II. 結果及び考察

### ○全体評価

#### ・春学期

表3から、学生の授業評価は、すべての質問項目で「とてもそう思う」が昨年度と同様に70%以上で、特に、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)は87%で積極的に授業に参加しようとする姿勢が伺える。総じて、学生の受講態度を問う項目は高率であり、真面目に授業に取り組んでいる姿が伺える。

図1の学生による授業満足度を集計したグラフより「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価レベルでは、学生の受講意識を問う項目はいずれも90%程度を示している。このことは本学の就業に向けた学習の意識付けがしっかりできていることに他ならない。教員の授業方法や内容を問う項目においては、全項目85%以上の肯定的評価となっていることは、教員の本学学生の目指している方向性に合致した教育内容を行い、学生の理解度を考慮した授業方法を行っていることと言える。しかし、この授業はわかりやすかった項目で7%の学生が否定的評価をしていることは、理解度が不足している学生がいることを教員は自覚しなければならない。これらのことから、教員の授業運営及び学生に対する姿勢と学生の心構えが相互に触れあい、自己実現に向けた教育活動が適切に推進されていると考えられる。

表3 全体評価（春学期） 4学科全体評価（春学期）

	とても 思う	そう 思う	どちら でもない	あまり 思わない	まったく 思わない	無 回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	71%	15%	8%	4%	3%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	72%	15%	8%	3%	2%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	74%	15%	7%	3%	2%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	74%	14%	7%	2%	2%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	81%	12%	5%	1%	1%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	82%	11%	5%	1%	1%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	73%	16%	8%	2%	2%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	80%	12%	5%	1%	2%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	87%	8%	3%	1%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	76%	15%	6%	1%	1%	0%
Q11 知識・技能が身についた	72%	16%	8%	2%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	70%	18%	9%	2%	2%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	68%	18%	9%	3%	2%	0%

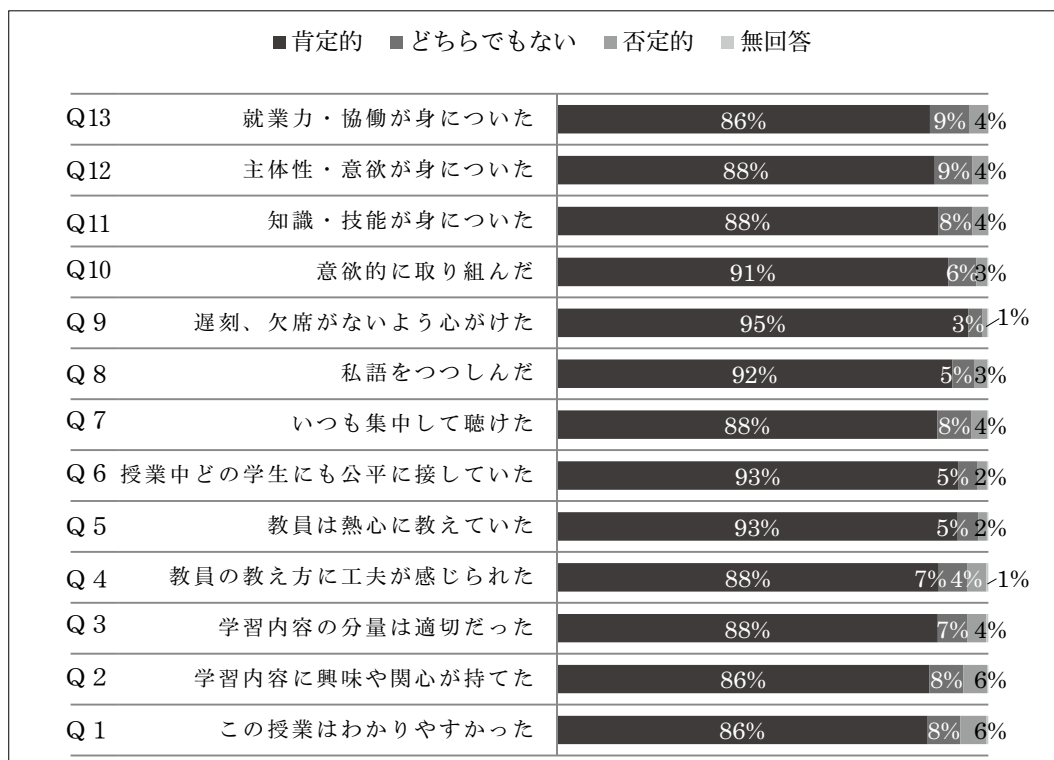


図1 学生による授業満足度（春学期） 4学科全科目平均（春学期）

## ・秋学期

表4から、「とてもそう思う」評価では、学生の受講態度を問う項目で、春学期に比べ同等程度で、学生の受講意識のマンネリ化が防げていることが認められた。教員への評価においても、同程度の評価となった。これらのことから教員の在学生の学力を把握し、能力に応じた授業を展開していることを裏付けている。あわせて、学生も自らの進路を明確に意識し、授業の位置づけが理解できてきていることである。

図2の学生による授業満足度を集計したグラフより「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価レベルでは、学生の受講意識を問う項目はいずれも85%以上を示しており、春学期と秋学期も同等である。教員の教え方を問う項目で、春学期において否定的評価が秋学期ではいずれも数%減少している。これは春学期において学生の自らの評価を教員が自覚し、理解度の低い学生への丁寧な講義に修正したことがこの結果として表れている。この結果から学生による教員の授業評価が、教員の授業の質の向上に結びついて

いることとして、今後も続ける必要を感じる。

## ○学科間の比較

## ・春学期

表5から学科間の特徴を見てみると、学生の理解度を示すQ1、Q2で比較すると、演習や実習等の体験的授業が多いライフデザイン総合学科や幼児教育学科の肯定的評価が80%を超え、1年次の講義科目が比較的多い食物栄養学科や介護福祉学科の肯定的評価が70%後半になっている。このことは、食物栄養学科の講義科目(内容)が化学や生物の基礎的知識があることを前提としての授業展開を行っており、高等学校でこれらの科目の受講が不十分な学生が入学してきていることもこの結果となっていると考えられる。そのため、今後は入学前教育や入学後の早期の基礎的学習を必要としている。教員の教育態度を示すQ5、Q6は、肯定的評価として全学科85%~95%を超えている。全学科、教員へ評価は高い。学力の三要素の達成度の意識調査項目では、介護福祉学科では75%が肯定的に自らの成

表4 全体評価(秋学期) 4学科全体評価(秋学期)

	とても 思う	だいた いそう 思う	どちら とも 言えな い	あまり 思わな い	まっ たく 思わな い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	71%	15%	8%	2%	2%	2%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	71%	15%	8%	2%	2%	2%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	72%	15%	8%	2%	1%	2%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	73%	14%	8%	2%	1%	2%
Q 5 教員は熱心に教えていた	79%	12%	5%	1%	1%	2%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	78%	12%	6%	1%	1%	2%
Q 7 いつも集中して聴けた	72%	15%	8%	2%	2%	2%
Q 8 私語をつつしんだ	75%	13%	7%	2%	2%	2%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	83%	8%	5%	1%	1%	2%
Q10 意欲的に取り組んだ	75%	14%	8%	1%	1%	2%
Q11 知識・技能が身についた	73%	16%	8%	2%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	72%	17%	9%	1%	1%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	69%	19%	10%	2%	1%	0%

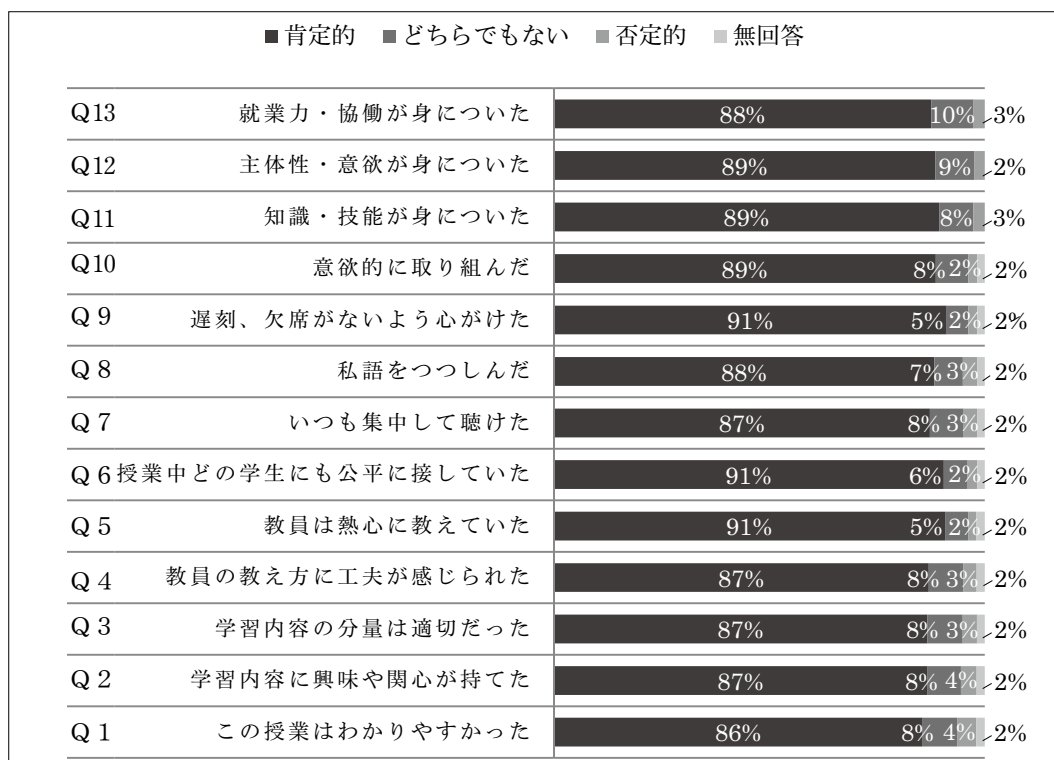


図2 学生による授業満足度（秋学期） 4学科全科目平均（秋学期）

長を自覚できており、他の3学科は80%を超える達成感を持っていた。学年初めの段階で教育成果はかなり出ていると思われる。

・秋学期

表6から、肯定的評価に関して学科別に見ると、他学科に比して若干厳しい評価が出ていた食物栄養学科、介護福祉学科では、学生の授業に取り組む意欲を示す割合が、肯定的評価として

表5 全体評価（春学期・学科間比較）

	4 + 5 [肯定的評価]					3					1 + 2 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	83%	74%	89%	78%	81%	8%	13%	6%	15%	10%	9%	13%	4%	6%	8%
Q 2	82%	77%	89%	78%	82%	7%	12%	7%	17%	11%	10%	11%	3%	5%	7%
Q 3	87%	81%	90%	82%	85%	7%	10%	6%	14%	9%	6%	9%	4%	3%	6%
Q 4	84%	80%	91%	84%	85%	9%	11%	6%	11%	9%	7%	9%	3%	4%	6%
Q 5	90%	89%	95%	88%	90%	6%	7%	4%	10%	7%	4%	3%	1%	2%	3%
Q 6	91%	90%	95%	86%	90%	5%	6%	3%	11%	6%	4%	3%	2%	2%	3%
Q 7	85%	82%	91%	76%	84%	8%	13%	5%	20%	11%	7%	5%	3%	3%	5%
Q 8	86%	95%	94%	80%	89%	6%	4%	4%	15%	7%	8%	1%	2%	4%	4%
Q 9	94%	92%	97%	91%	94%	3%	6%	2%	8%	5%	2%	2%	0%	1%	1%
Q10	88%	87%	93%	81%	87%	6%	9%	5%	17%	9%	6%	4%	2%	1%	3%
Q11	85%	81%	93%	76%	84%	7%	14%	5%	21%	12%	9%	5%	2%	3%	5%
Q12	83%	80%	91%	77%	83%	9%	13%	6%	21%	12%	8%	7%	2%	2%	5%
Q13	79%	83%	92%	74%	82%	8%	12%	6%	23%	12%	12%	5%	2%	2%	5%

75%を超える評価に改善している。秋学期では、教員に対するほとんどの項目が80%を超える評価に改善され、学生の受講意識も80%程度に好転している。他の学科（ライフデザイン総合学科、幼児教育学科）はいずれも肯定的評価は80%後半から90%になっている。全学科とも多くの項目で改善が認められることから、学生、教員とも、各授業の位置づけが明確に捉えられ、教員の努力が形になっていると言える。学力の三要素の達成感については、全学科とも春学期に比べ成長を自覚できる割合が3%程度増加している。各授業の位置づけが多くの学生に理解が進んでいることであると推測できる。

以上のことから、全体的には、令和2年度も学生の授業に対する満足度はかなり高いレベルで推移してきたものと思われる。幅の広い学生層に誠実に対面し、適切な授業の提供に意を用いた教員の努力の賜であろう。この結果に満足することなく、教える立場の教員は、常に、自らの授業を冷静に見つめ、学生の実態に即したものになっているか、学習者を中心に据えた授業になっているか等、シビアな自己評価・授業評価を行い、真摯な態度で授業改善に取り組むことが必要であろう。その際、個人として授業・研究を

行うことはもちろん重要であるが、学科やグループ等で組織的に研究活動を行い、全体としての人材育成の成果を常に意識した上で、PDCAサイクルをまわす継続的取り組みが大切であると考え。

#### ○学科別授業評価

以下、学科・学年ごとに考察を加える。ただし、留学生（日本語教育課程）については、学科の枠を取り払って学年単位でまとめて集計している。

##### 1. ライフデザイン総合学科 1年

春学期（表7、図3）、秋学期（表8、図4）に示しているとおり、春学期の学びの満足度（とてもそう思う）は概ね70%以下であるが、秋学期は75%を超えている。特に教員の授業状況Q5（教員は熱心に教えていた）については、94%と学生は教員に良い評価を与えている。学生の受講意欲は、春学期に比べ秋学期は10%以上の向上が認められ、90%以上となっている。

入学して自分の夢の達成に向け、意欲を持って受講してきたが、高校までの学習内容と、短大での内容の違いから、学生の受講意識が低い状

表6 全体評価（秋学期・学科間比較）

	4 + 5 [肯定的評価]					3					1 + 2 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	86%	76%	91%	81%	84%	7%	14%	6%	12%	10%	7%	10%	3%	2%	5%
Q 2	88%	78%	92%	81%	85%	5%	15%	5%	13%	9%	6%	7%	2%	1%	4%
Q 3	86%	78%	92%	81%	84%	9%	14%	5%	12%	10%	5%	7%	2%	1%	4%
Q 4	88%	77%	92%	84%	85%	7%	16%	6%	9%	10%	5%	7%	2%	1%	4%
Q 5	94%	87%	95%	84%	90%	4%	8%	4%	10%	6%	3%	5%	1%	0%	2%
Q 6	94%	86%	95%	84%	89%	3%	10%	4%	10%	7%	3%	4%	1%	1%	2%
Q 7	91%	81%	91%	80%	86%	4%	12%	7%	13%	9%	5%	7%	2%	1%	4%
Q 8	87%	89%	92%	80%	87%	5%	7%	6%	11%	8%	8%	3%	2%	3%	4%
Q 9	93%	89%	96%	84%	90%	3%	7%	3%	10%	6%	4%	4%	1%	0%	2%
Q10	93%	84%	93%	79%	87%	5%	11%	5%	15%	9%	2%	5%	1%	1%	2%
Q11	91%	80%	94%	83%	87%	5%	14%	4%	16%	10%	4%	5%	1%	1%	3%
Q12	89%	82%	93%	82%	86%	7%	14%	6%	17%	11%	3%	5%	1%	1%	3%
Q13	88%	80%	95%	83%	86%	9%	14%	4%	17%	11%	3%	6%	1%	1%	3%

況から、秋学期からは自らの課題解決ができるようになり、学習意欲が大幅に向上したと思われる。

表7 ライフデザイン総合学科 1年 春学期

	思う とても そう	だ いたい そう 思う	ど ちら も 言 え な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ま っ た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	66%	17%	8%	5%	5%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	65%	17%	6%	6%	6%	1%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	70%	18%	5%	2%	5%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	69%	15%	6%	5%	4%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	76%	14%	5%	4%	2%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	77%	14%	4%	3%	2%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	64%	21%	7%	4%	3%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	76%	12%	5%	3%	4%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	92%	4%	1%	3%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	68%	20%	5%	3%	4%	0%
Q11 知識・技能が身についた	61%	23%	4%	5%	6%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	59%	25%	6%	3%	6%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	50%	25%	9%	9%	8%	0%

表8 ライフデザイン総合学科 1年 秋学期

	思う とても そう	だ いたい そう 思う	ど ちら も 言 え な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ま っ た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	75%	11%	7%	3%	3%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	76%	13%	5%	4%	3%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	75%	11%	11%	2%	2%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	75%	12%	9%	2%	2%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	82%	12%	3%	1%	1%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	83%	11%	2%	1%	3%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	77%	14%	4%	2%	2%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	76%	13%	5%	3%	2%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	89%	5%	2%	4%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	81%	12%	4%	1%	2%	0%
Q11 知識・技能が身についた	79%	11%	5%	2%	2%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	76%	12%	8%	1%	3%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	73%	13%	11%	1%	2%	0%

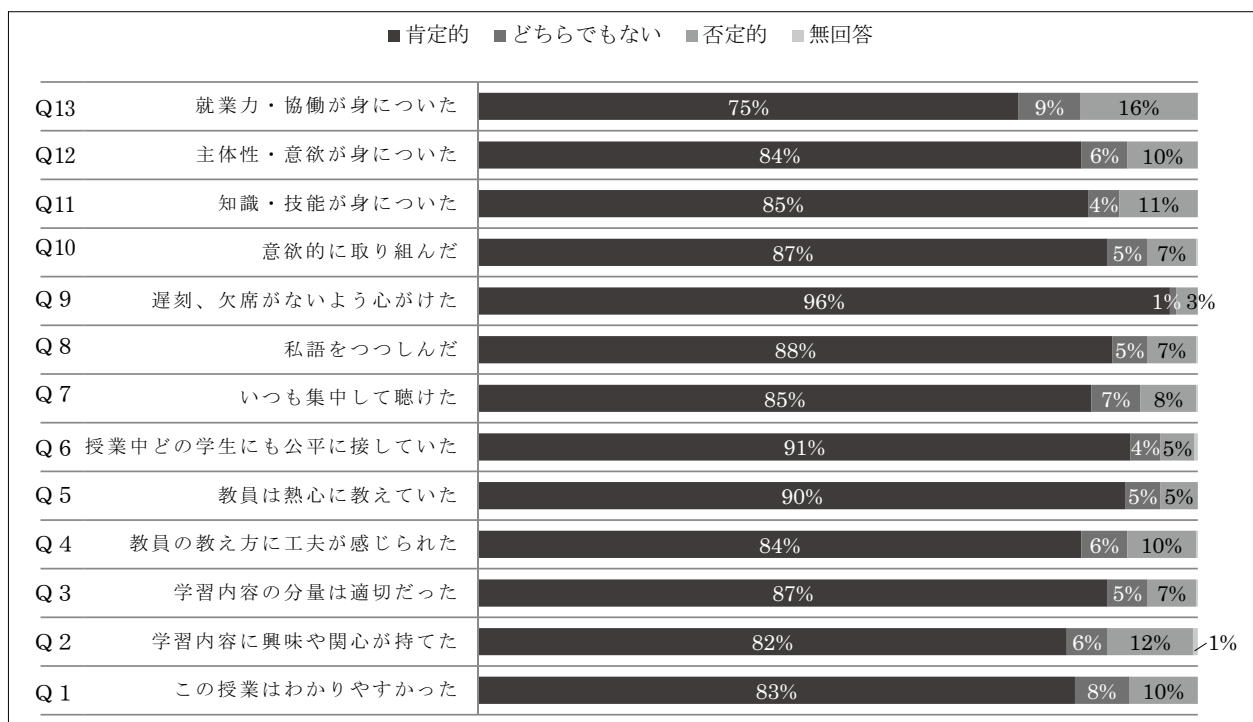


図3 ライフデザイン総合学科1年（春学期満足度）

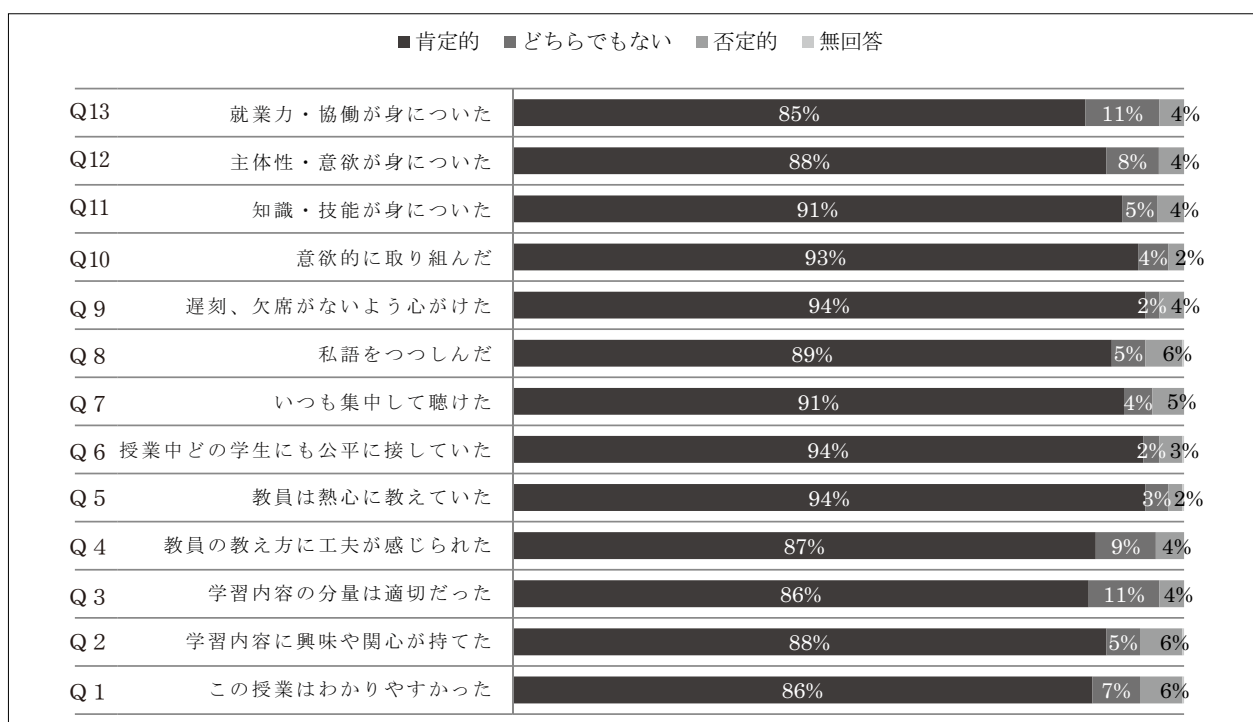


図4 ライフデザイン総合学科1年（秋学期満足度）

## 2. ライフデザイン総合学科2年

春学期（表9、図5）、秋学期（表10、図6）に示しているとおり、春学期の満足度（肯定的評価）の傾向は1年次生秋学期の良い流れがそのまま2年次につづき、学習意欲が卒業時に大幅に向上している。新年度を迎え教員の意欲は旺盛

である。秋学期は、学生の集中力、理解度は高くなっている。特に2年次生はファッションショー、卒業制作展へ向けて、個々の作品の制作物の完成を目指している。学力の三要素の達成感卒業時には10%以上向上し、特に就業力の成長は殆どの学生が実感している。2年間の教育成果

が達成されている状況である。

表9 ライフデザイン総合学科 2年 春学期

	とても 思う	だいた い 思う	ど ちら も 言 え な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ま っ た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	68%	14%	9%	4%	5%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	67%	17%	9%	4%	3%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	67%	18%	10%	3%	2%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	67%	17%	12%	2%	2%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	74%	16%	7%	2%	1%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	78%	13%	7%	2%	1%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	70%	16%	10%	3%	2%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	67%	16%	8%	5%	4%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	76%	16%	7%	1%	1%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	71%	18%	6%	2%	2%	0%
Q11 知識・技能が身についた	70%	14%	10%	3%	3%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	63%	19%	13%	3%	2%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	67%	18%	8%	4%	3%	0%

表10 ライフデザイン総合学科 2年 秋学期

	とても 思う	だいた い 思う	ど ちら も 言 え な い	あ ま り そ う 思 わ な い	ま っ た く そ う 思 わ な い	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	79%	7%	6%	5%	3%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	77%	12%	4%	4%	3%	1%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	77%	10%	5%	5%	3%	1%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	78%	12%	4%	4%	3%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	82%	10%	4%	2%	2%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	84%	9%	4%	1%	3%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	82%	8%	5%	3%	3%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	78%	5%	6%	7%	5%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	85%	6%	6%	2%	2%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	83%	9%	5%	1%	2%	0%
Q11 知識・技能が身についた	82%	9%	5%	2%	2%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	80%	11%	6%	1%	2%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	85%	9%	4%	1%	0%	0%

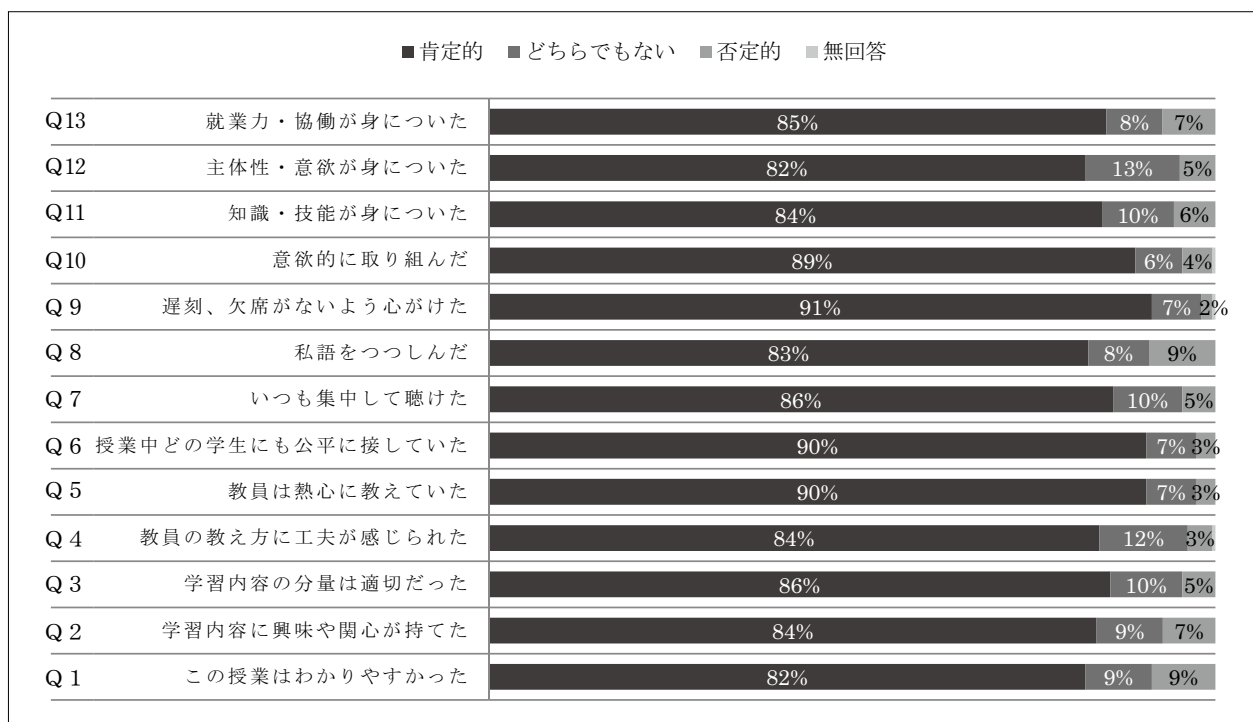


図5 ライフデザイン総合学科2年（春学期満足度）

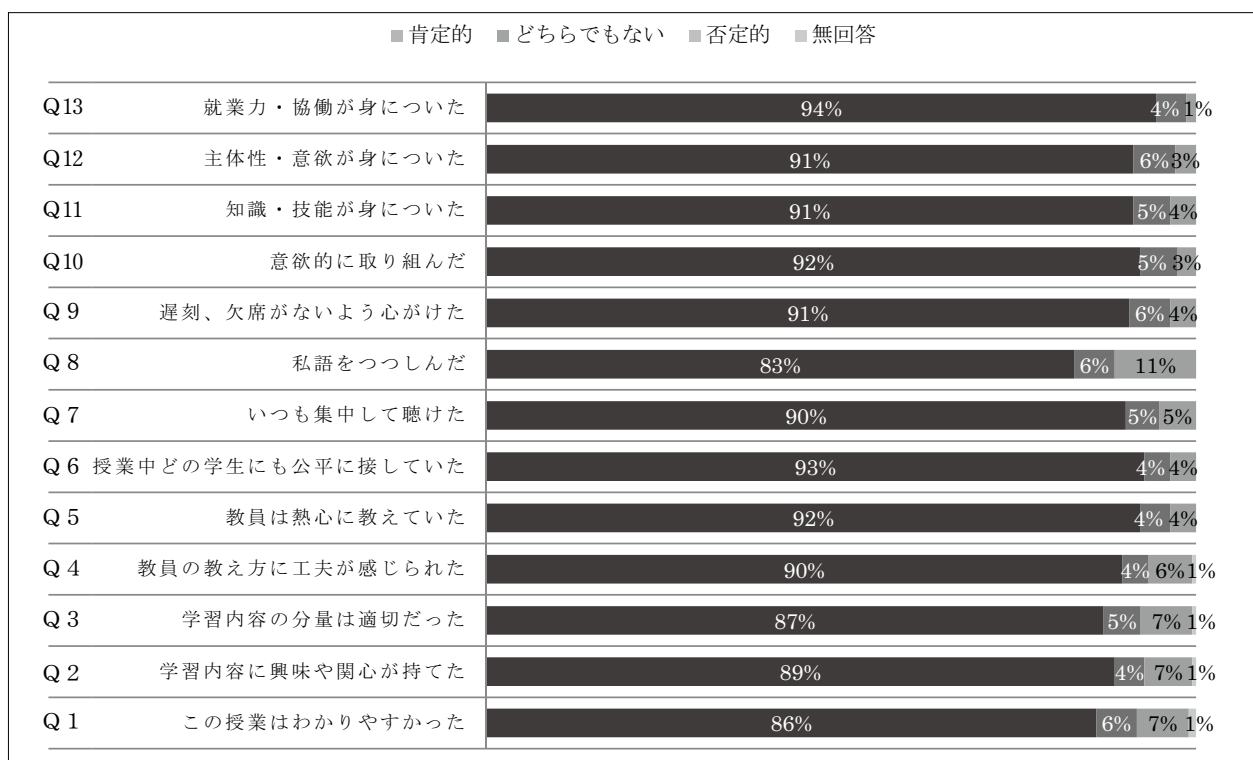


図6 ライフデザイン総合学科2年（秋学期満足度）

### 3. 食物栄養学科1年

春学期（表11、図7）、秋学期（表12、図8）に示しているとおおり、春学期の満足度（肯定的評価）において、教員の授業への向かい方は学生に好評である。しかし、肯定的評価としての「とて

もそう思う」の評価が40%以下となっていることは、学生にとっては積極的に勧められる授業とは言いがたいと分析する。学生の受講姿勢は良好である。これらのことから、学習内容が在学生のレベルに合っていないと、理解度が低い傾向

を示している。高校時代に化学や生物を履修できていない学生が比較的多いこともこの結果と比例している。教員は教科書に準拠した授業ではなく、学生の理解度を常に確認しながらの教授方法の工夫が必要である。秋学期に入ると、春学期に学んだ内容の延長線上の科目が多くな

ることもあり、学生の興味関心は理解度もやや減少している。学力の低い学生に対して、補講などの実施を行うことで、底上げを図ることが望まれる。学んだことを、学生一人ひとりの「できる」ようになった実感を得られるまんどくどを上げる教育の工夫を期待したい。

表 11 食物栄養学科 1年 春学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	45%	24%	13%	11%	7%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	49%	24%	14%	9%	4%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	54%	22%	11%	7%	5%	1%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	50%	24%	12%	7%	5%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	65%	21%	8%	3%	2%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	69%	20%	5%	3%	1%	1%
Q 7 いつも集中して聴けた	54%	26%	14%	4%	2%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	81%	14%	3%	1%	0%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	84%	10%	5%	0%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	62%	24%	9%	3%	1%	0%
Q11 知識・技能が身についた	48%	29%	17%	4%	2%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	46%	30%	16%	5%	3%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	50%	30%	13%	6%	1%	0%

表 12 食物栄養学科 1年 秋学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	34%	34%	18%	8%	6%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	38%	37%	17%	4%	5%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	38%	36%	17%	5%	4%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	38%	32%	20%	6%	3%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	59%	25%	11%	4%	2%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	55%	30%	11%	3%	2%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	47%	34%	13%	4%	3%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	64%	25%	9%	2%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	75%	16%	7%	1%	1%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	55%	29%	11%	3%	2%	1%
Q11 知識・技能が身についた	35%	41%	17%	4%	3%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	34%	43%	17%	4%	2%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	30%	44%	18%	4%	4%	0%

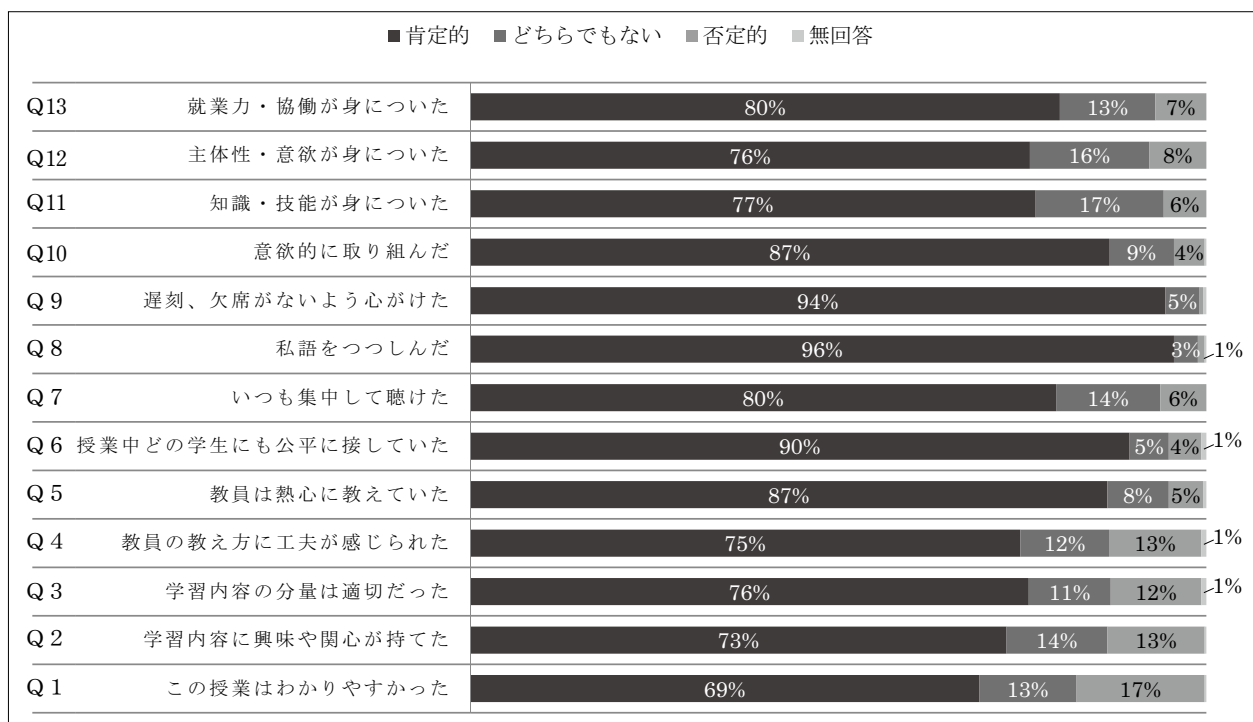


図7 食物栄養学科1年（春学期満足度）

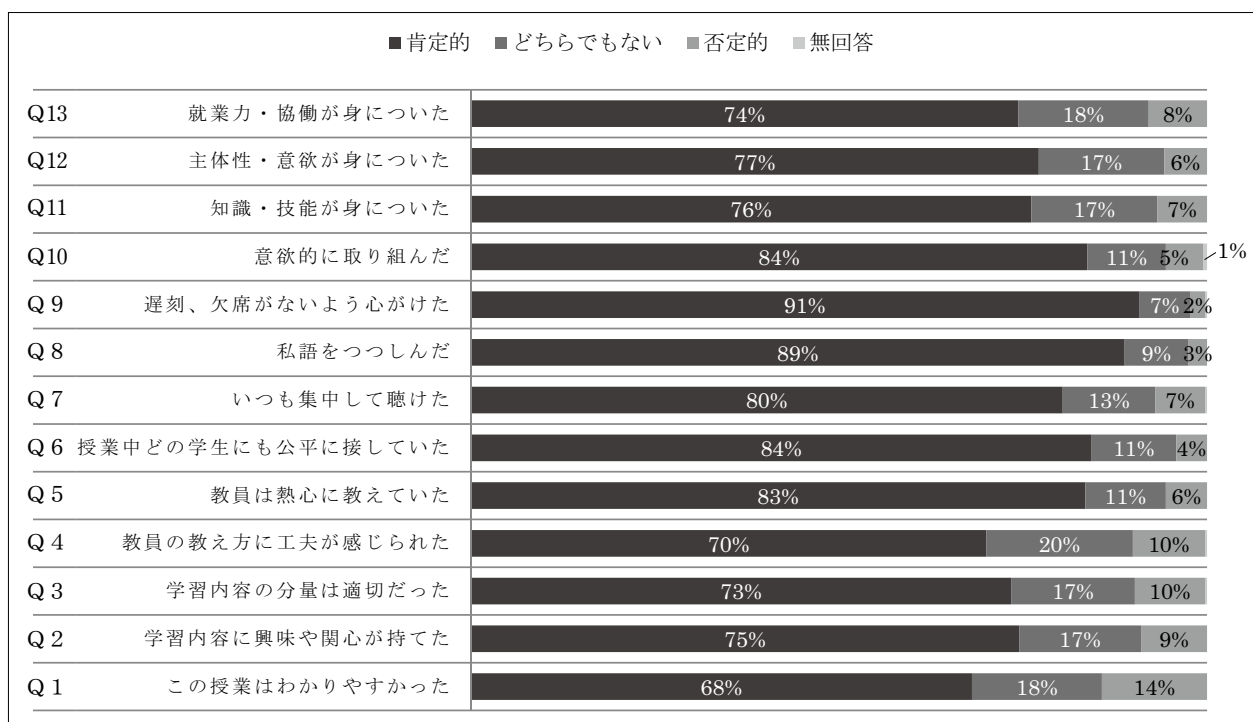


図8 食物栄養学科1年（秋学期満足度）

#### 4. 食物栄養学科2年

春学期（表13、図9）、秋学期（表14、図10）に示しているとおおり、春学期の満足度（肯定的評価）において、4学科全てにおいて最も低い傾向を示している。教員も授業の工夫が足りないと言わざるを得ない。教員の評価は90%程度の肯

定的評価を持っているのに、学力の三要素については90%を下回っていることは、自らの成長を実感できていない学生が10%を超える状況であると認識し、学生の一人ひとりを見た授業展開を考える必要がある。

秋学期になって教員に対する評価は一段と厳

しいものとなっている。学生自身も受講の姿勢は春学期同様である。卒業時には栄養士等で就業するものが大半であることから、学生の成長を実感できる場を設定し、就業の自信をつけさせる工夫が求められる。ただし、学生の否定的評価は数%にすぎず、本学の教育内容は概ね

理解され、就業へ結びつける成果は達成できている。

表 13 食物栄養学科 2年 春学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	64%	18%	12%	5%	1%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	66%	18%	10%	5%	1%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	68%	21%	8%	3%	1%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	70%	20%	8%	0%	2%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	80%	13%	6%	1%	0%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	75%	15%	8%	0%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	67%	19%	11%	1%	3%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	79%	15%	6%	0%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	77%	11%	9%	0%	3%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	69%	18%	9%	2%	2%	0%
Q11 知識・技能が身についた	67%	22%	8%	2%	2%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	65%	22%	9%	4%	1%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	65%	21%	11%	2%	1%	0%

表 14 食物栄養学科 2年 秋学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	59%	27%	10%	3%	1%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	59%	24%	13%	3%	1%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	60%	23%	11%	3%	1%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	62%	23%	11%	2%	2%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	71%	20%	5%	2%	1%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	67%	21%	8%	3%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	61%	22%	11%	5%	1%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	68%	22%	6%	4%	0%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	70%	16%	7%	6%	1%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	63%	21%	11%	3%	1%	0%
Q11 知識・技能が身についた	64%	23%	10%	3%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	62%	25%	10%	2%	1%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	57%	29%	10%	3%	1%	0%

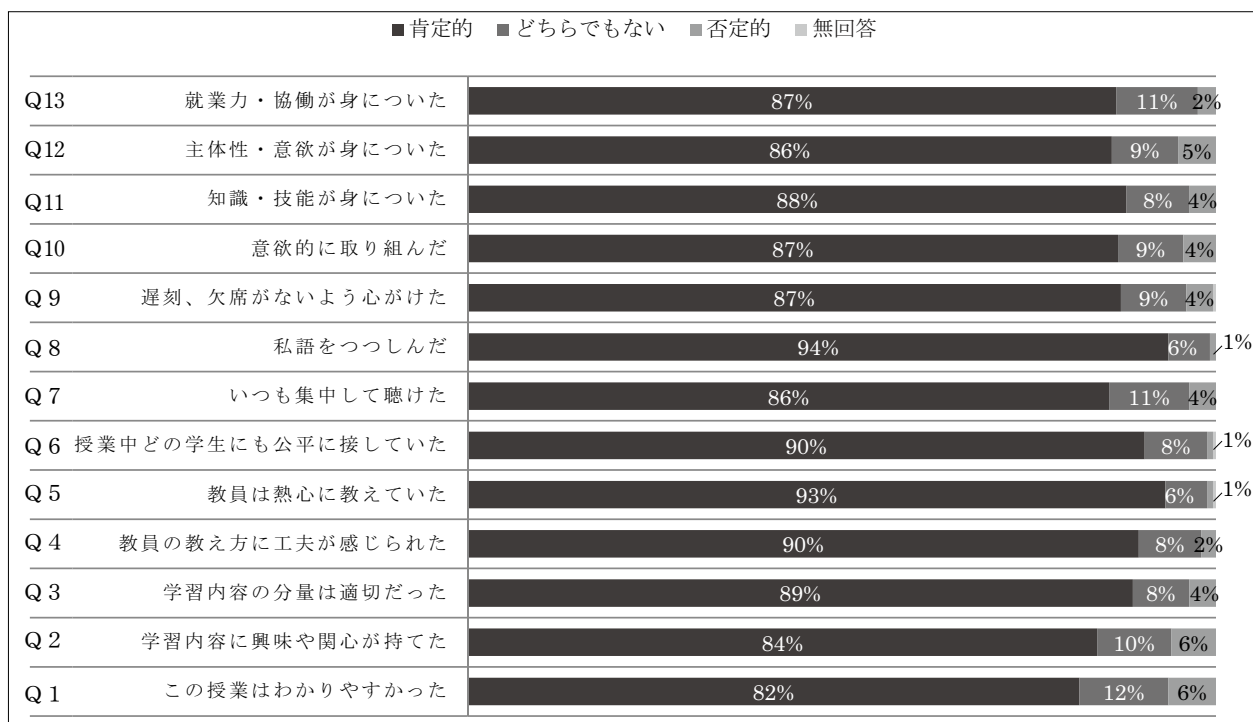


図9 食物栄養学科2年（春学期満足度）

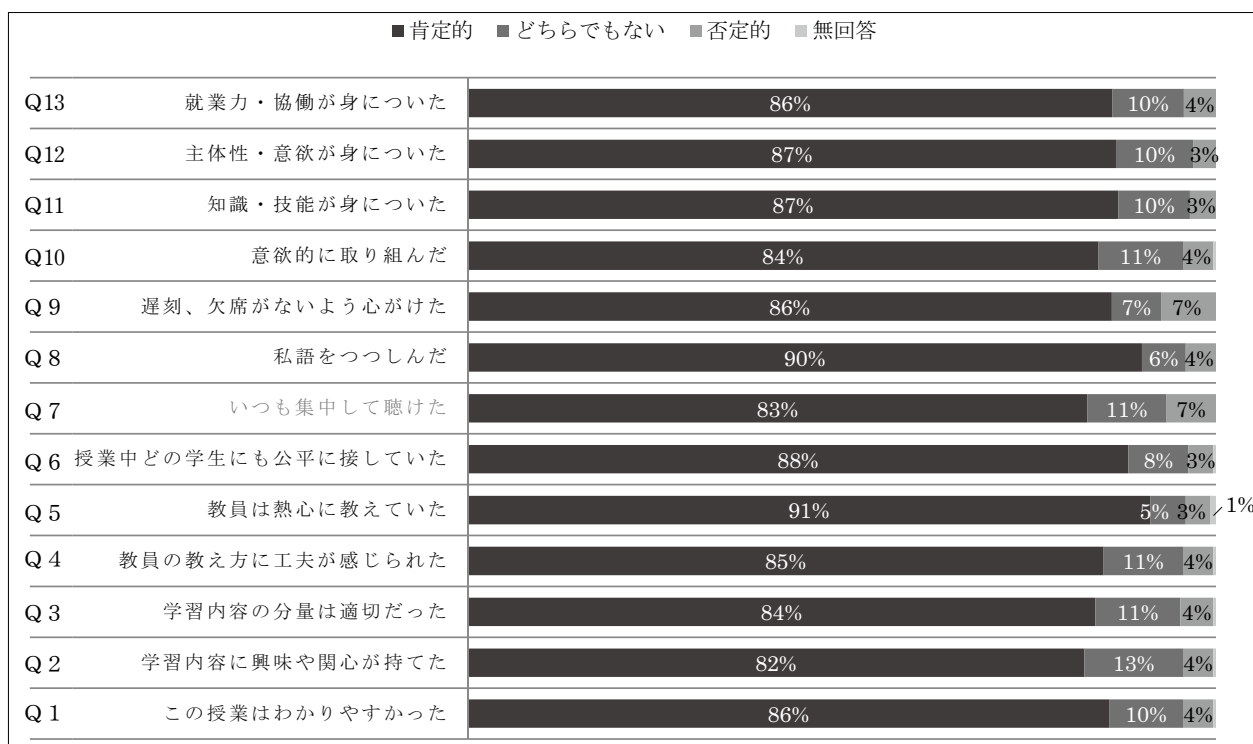


図10 食物栄養学科2年（秋学期満足度）

## 5. 幼児教育学科1年

春学期（表15、図11）、秋学期（表16、図12）に示しているとおおり、春学期の満足度（肯定的評価）において、学生の受講意欲は旺盛である。教員の教え方の工夫が見られ評価は高い。

秋学期については、満足度はいずれの項目も春学期同様に高い。学生の意欲的に取り組んだという項目でも90%を超えている。幼稚園教諭、保育士を目指す意欲は旺盛に見える。ただし、春・秋学期において、数名の学生に否定的評価を

もっていることを教員は受け止めていただきたい。学力の三要素の達成感も非常に高く、隣接しているひめやま幼稚園の身近な実習が学生の

成長を実感させていることも影響していると思われる。

表 15 幼児教育学科 1年 春学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	74%	15%	7%	3%	1%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	75%	13%	8%	2%	2%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	76%	15%	5%	2%	1%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	75%	15%	6%	2%	2%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	85%	10%	3%	1%	0%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	85%	11%	2%	1%	1%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	75%	16%	6%	2%	2%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	82%	12%	4%	1%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	90%	9%	1%	0%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	80%	13%	5%	0%	1%	0%
Q11 知識・技能が身についた	79%	15%	4%	1%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	78%	14%	5%	1%	1%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	81%	13%	6%	1%	0%	0%

表 16 幼児教育学科 1年 秋学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	74%	15%	6%	2%	2%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	77%	14%	5%	2%	1%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	76%	16%	5%	1%	1%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	77%	14%	6%	1%	1%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	83%	13%	2%	1%	1%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	84%	11%	3%	1%	1%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	76%	16%	6%	1%	2%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	79%	13%	6%	1%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	93%	4%	1%	0%	1%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	81%	12%	5%	1%	1%	0%
Q11 知識・技能が身についた	79%	14%	5%	1%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	78%	14%	6%	0%	1%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	81%	13%	4%	1%	0%	0%

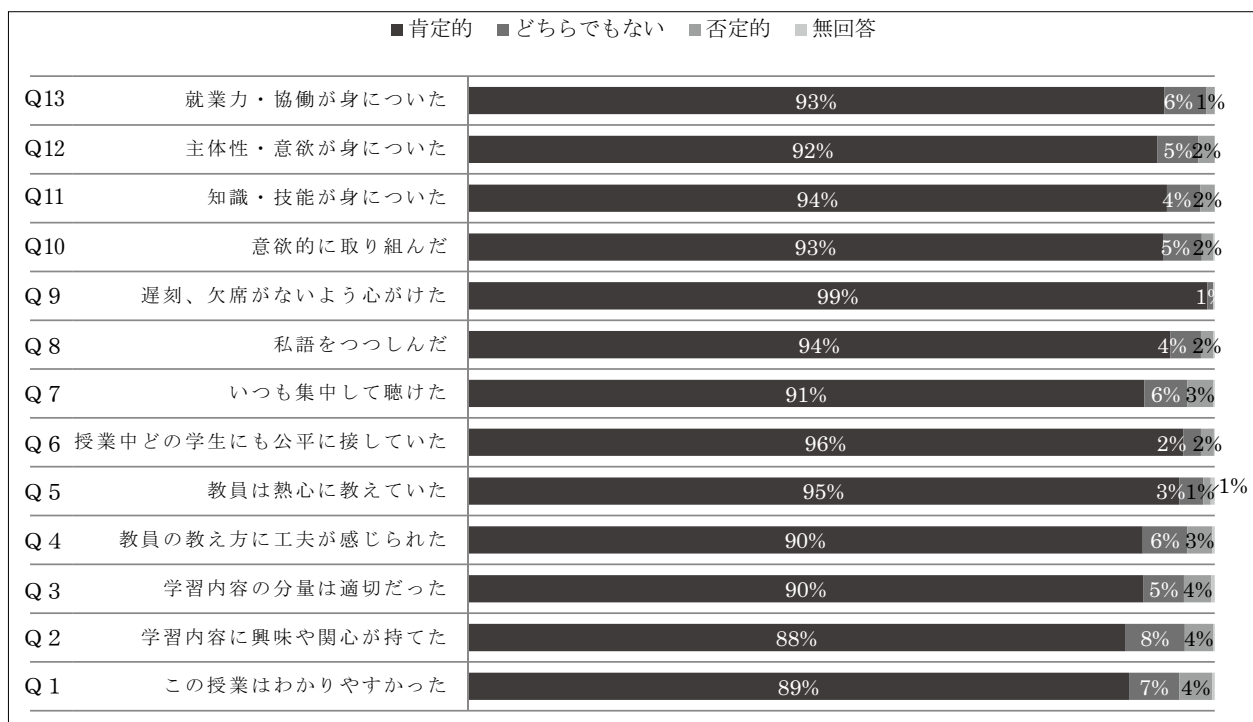


図11 幼児教育学科1年（春学期満足度）

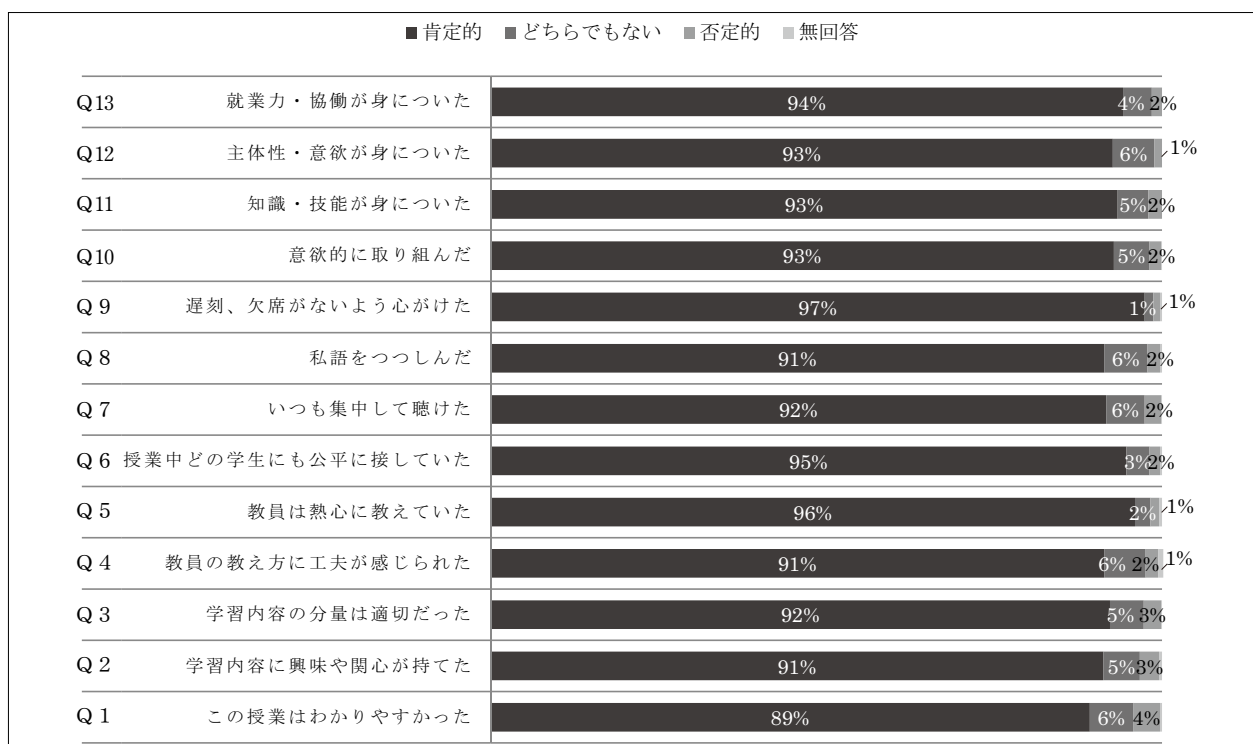


図12 幼児教育学科1年（秋学期満足度）

## 6. 幼児教育学科2年

春学期（表17、図13）、秋学期（表18、図14）に示しているとおおり、春学期の満足度（肯定的評価）において、教員の授業に対する評価は90%を超え概ね高い。学生の受講意欲は旺盛である。

全ての項目で否定的評価は数%であり、学生の満足度は高い。

秋学期には幼児教育学科のミュージックカーニバルが中止となり、学内でのひめやま幼稚園児の参加での学内発表会に切り替えたが、学生

たちの自発的学びが自らの成長を実感できたと思われて、コロナ禍での学習成果の達成はできたと理解できる。そして2年次生の就職も内定

(決定)が出され、学生自身の就職先と現在の学習内容が一致していることも幼児教育学科のディプロマポリシーの達成に繋がっている。

表 17 幼児教育学科 2年 春学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	75%	16%	5%	2%	2%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	76%	16%	5%	1%	2%	1%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	77%	12%	6%	3%	2%	1%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	78%	14%	5%	1%	1%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	83%	11%	4%	1%	1%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	84%	10%	4%	1%	1%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	74%	19%	4%	1%	3%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	81%	13%	4%	1%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	86%	8%	4%	1%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	78%	15%	5%	1%	1%	0%
Q11 知識・技能が身についた	74%	18%	5%	2%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	68%	21%	8%	1%	1%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	68%	22%	7%	2%	1%	0%

表 18 幼児教育学科 2年 秋学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	84%	11%	5%	1%	0%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	81%	12%	4%	1%	0%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	81%	11%	6%	0%	1%	1%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	81%	11%	5%	1%	1%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	85%	8%	5%	0%	0%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	85%	10%	4%	1%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	73%	17%	8%	2%	0%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	78%	15%	6%	1%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	84%	10%	5%	1%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	79%	15%	5%	0%	0%	0%
Q11 知識・技能が身についた	78%	17%	4%	0%	0%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	77%	16%	5%	1%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	78%	18%	4%	1%	0%	0%

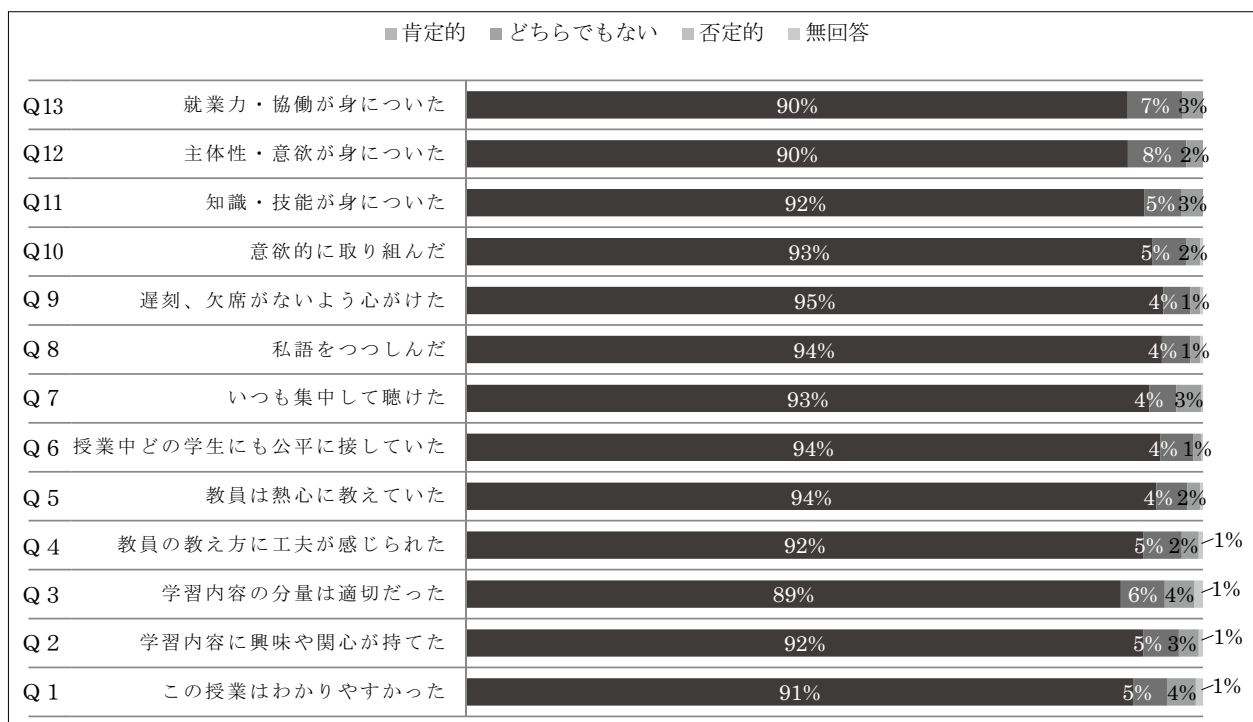


図13 幼児教育学科2年（春学期満足度）

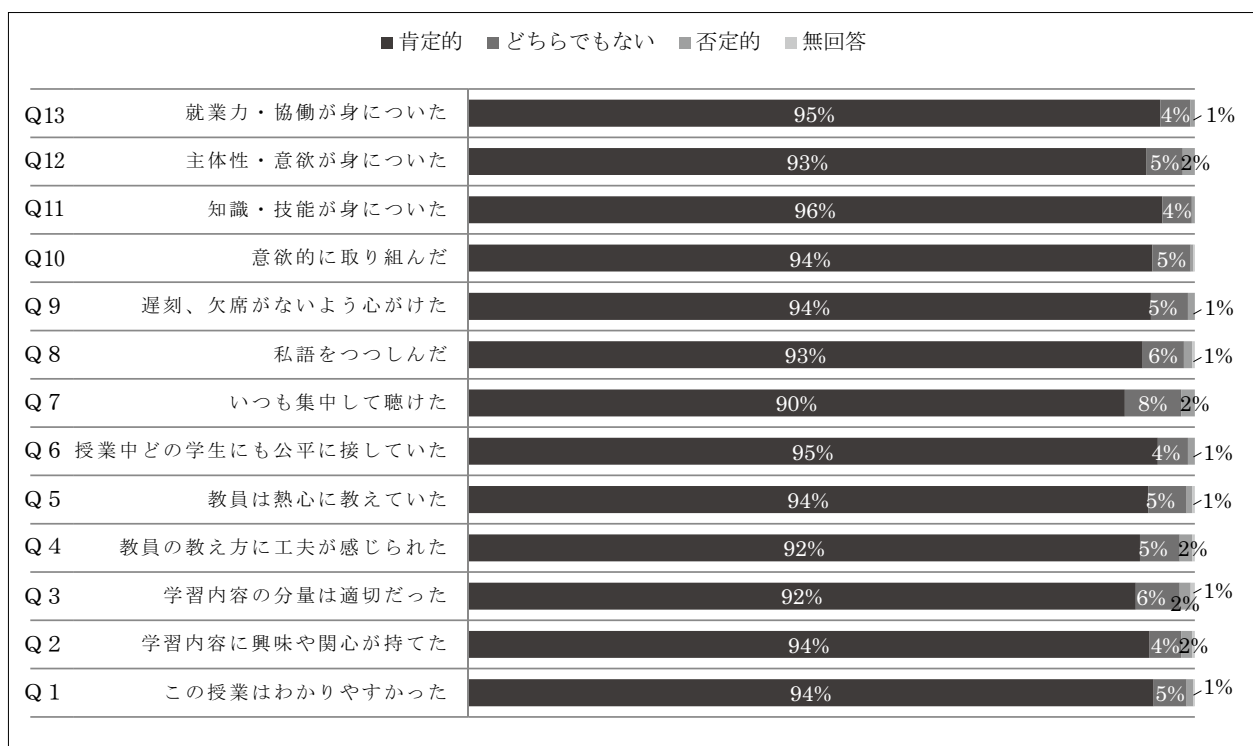


図14 幼児教育学科2年（秋学期満足度）

## 7. 介護福祉学科1年

春学期（表19、図15）、秋学期（表20、図16）に示しているとおおり、春学期の満足度（肯定的評価）において、教員の授業に対する評価は概ね高い。学生の受講意欲は旺盛である。全ての項目

で否定的評価は数%であり、学生の満足度は高い。学生の入学の目的である介護福祉士資格の取得と授業内容が一致していることも原因の一つである。

秋学期は、春学期同様に学生の授業への満足

度は高い。大半の学生は意欲も旺盛で、介護福祉学科の教員や授業に高い評価を与えている。2年次になると学外での実習が多くなる。学生

の意欲を失わない教育活動を期待する。

表 19 介護福祉学科 1年 春学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	66%	20%	9%	3%	1%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	68%	20%	8%	4%	0%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	73%	16%	9%	1%	0%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	77%	13%	6%	2%	1%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	83%	11%	5%	0%	0%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	84%	10%	5%	1%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	65%	16%	15%	2%	1%	1%
Q 8 私語をつつしんだ	70%	17%	13%	0%	0%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	87%	10%	3%	0%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	70%	16%	13%	2%	0%	0%
Q11 知識・技能が身についた	61%	20%	17%	2%	0%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	63%	19%	18%	0%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	62%	21%	17%	0%	0%	0%

表 20 介護福祉学科 1年 秋学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	67%	20%	5%	0%	2%	6%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	67%	21%	5%	1%	1%	6%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	68%	15%	9%	1%	1%	6%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	74%	14%	5%	1%	0%	6%
Q 5 教員は熱心に教えていた	78%	10%	6%	0%	0%	6%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	80%	7%	5%	1%	0%	6%
Q 7 いつも集中して聴けた	69%	15%	8%	1%	1%	6%
Q 8 私語をつつしんだ	76%	12%	5%	0%	0%	6%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	75%	12%	6%	1%	0%	6%
Q10 意欲的に取り組んだ	68%	14%	11%	1%	0%	6%
Q11 知識・技能が身についた	69%	20%	10%	1%	0%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	69%	18%	12%	1%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	68%	20%	11%	1%	0%	0%

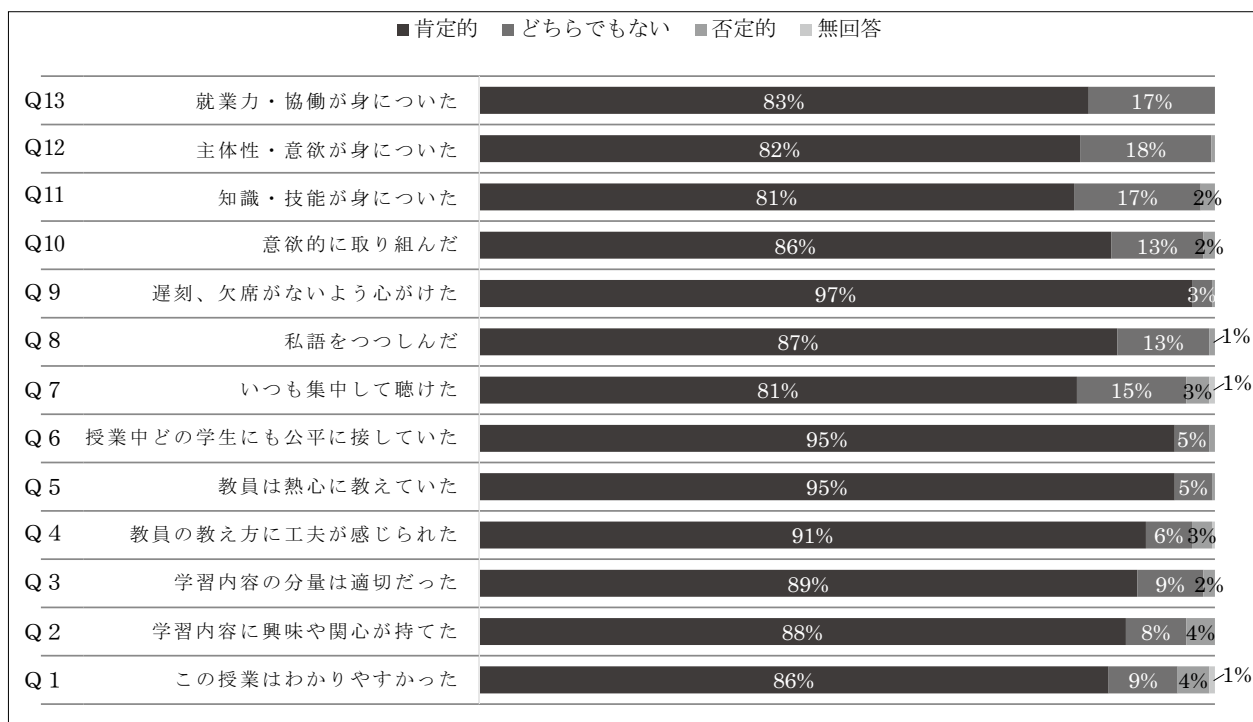


図15 介護福祉学科1年（春学期満足度）

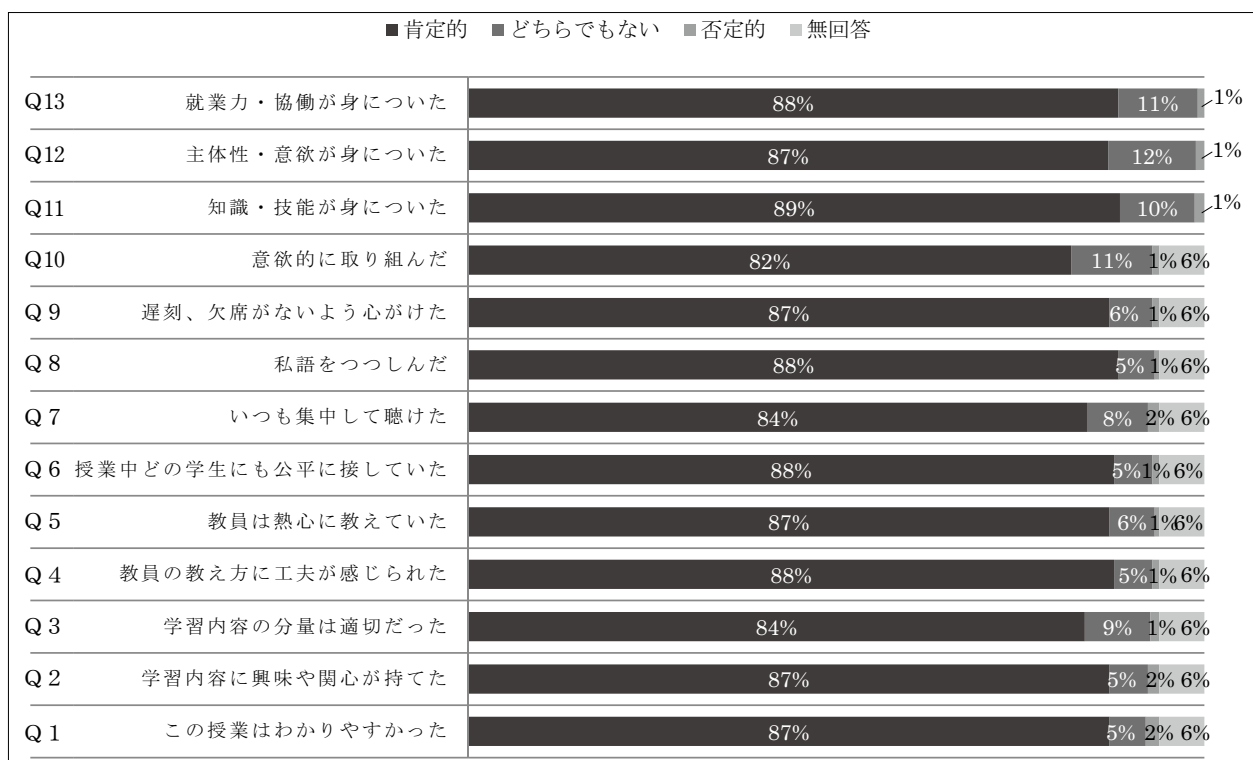


図16 介護福祉学科1年（秋学期満足度）

## 8. 介護福祉学科2年

春学期（表21、図17）、秋学期（表22、図18）に示しているとおおり、春学期の満足度（とてもそう思う）において、教員の授業に対する評価は50%と1年生に比べ20%程度低い。学生の受講

意欲も同様に低い。全ての項目で「どちらでもない」の評価が20%程度を占め、このクラス特有のものなのか、学習の位置付けが不明確のための達成感が低いのか、介護福祉学科の教員間で分析をする必要がある。介護福祉士養成の科目の

多くは体験学習が多く、学生の能力に応じた個別の指導について教員の積極的対応を期待する。

秋学期は、介護福祉学科の行事として「ふく

し・ふれ愛ひろば」という別府市内の老人会を招いての催しがある。この練習や就職先の内定(決定)もあり、日々充実した内容となっている

表 21 介護福祉学科 2年 春学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	48%	23%	20%	2%	5%	2%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	46%	22%	25%	3%	3%	1%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	50%	24%	19%	3%	2%	2%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	57%	21%	16%	2%	3%	2%
Q 5 教員は熱心に教えていた	63%	18%	15%	1%	2%	1%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	56%	22%	17%	2%	2%	2%
Q 7 いつも集中して聴けた	53%	18%	25%	1%	2%	1%
Q 8 私語をつつしんだ	57%	17%	18%	1%	6%	1%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	73%	13%	13%	0%	0%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	54%	22%	22%	1%	0%	1%
Q11 知識・技能が身についた	53%	18%	25%	3%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	49%	20%	27%	4%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	47%	21%	27%	3%	1%	0%

表 22 介護福祉学科 2年 秋学期

	とても思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	62%	12%	19%	1%	0%	5%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	61%	13%	20%	1%	0%	5%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	64%	15%	15%	1%	0%	5%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	66%	14%	14%	1%	0%	5%
Q 5 教員は熱心に教えていた	66%	15%	13%	0%	0%	5%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	65%	15%	15%	1%	0%	5%
Q 7 いつも集中して聴けた	61%	15%	18%	1%	0%	5%
Q 8 私語をつつしんだ	59%	13%	18%	1%	5%	5%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	67%	13%	15%	0%	0%	5%
Q10 意欲的に取り組んだ	61%	15%	19%	0%	0%	5%
Q11 知識・技能が身についた	63%	14%	21%	1%	0%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	63%	15%	21%	1%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	63%	15%	21%	1%	0%	0%

こともあり、従来は全ての項目において学生の肯定的評価は85%から90%程度となっているが、この2年生は70%程度であることの原因を突き止める必要がある。学生の目標としてきた希望の職種での就職決定は、学生の入学時の目標で

あり、ディプロマポリシーの達成もできているはずなのに学習や就業力達成の満足度が低い実感は、来年度の2年生に影響を与えないように期待する。

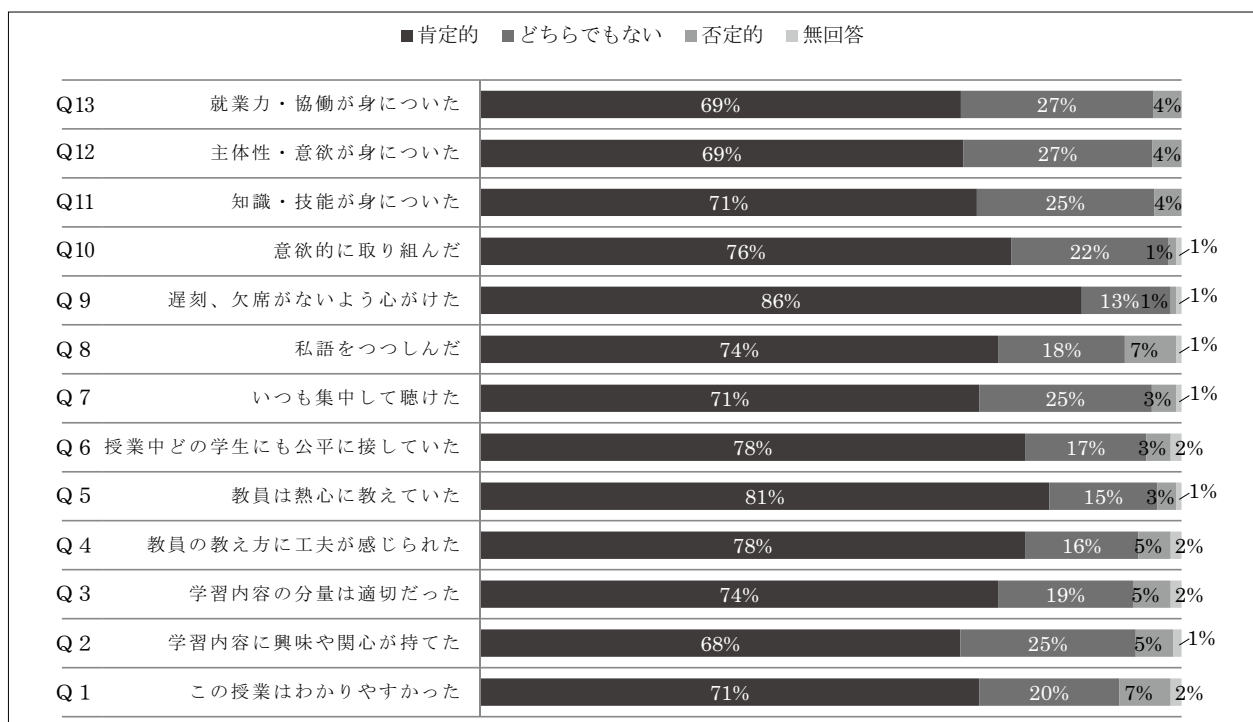


図17 介護福祉学科2年（春学期満足度）

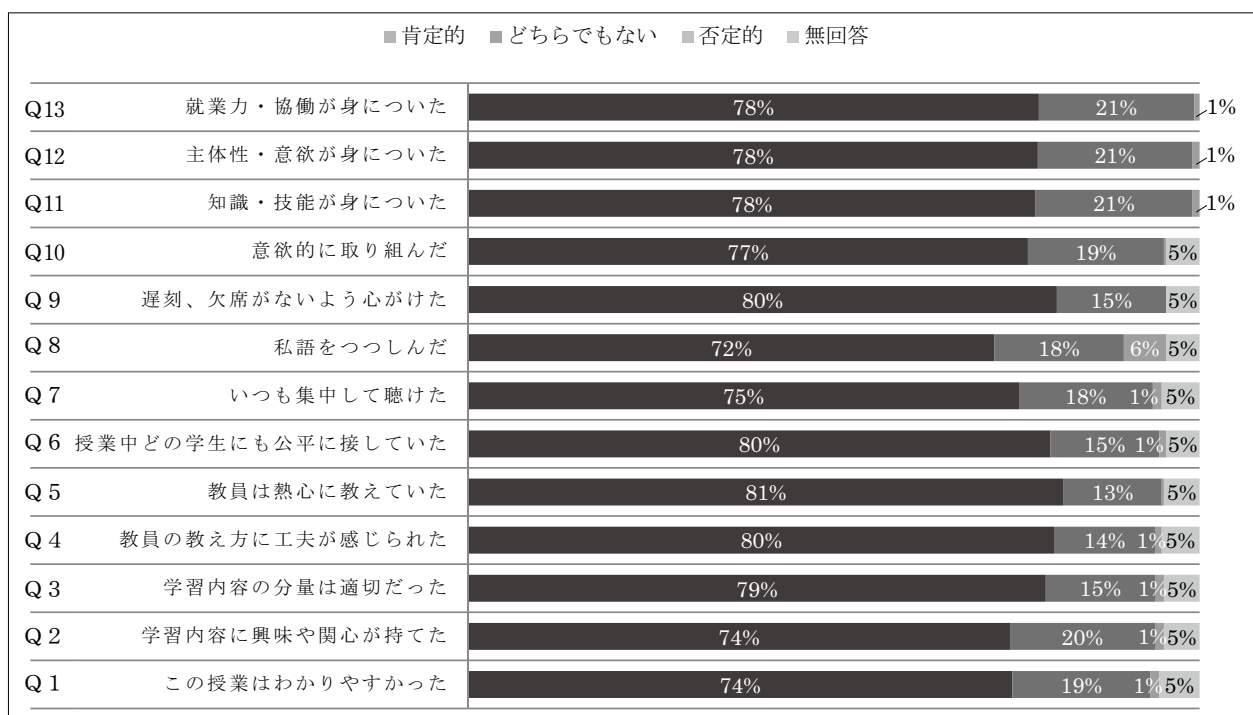


図18 介護福祉学科2年（秋学期満足度）

## 9. 留学生1年

留学生の大半は、秋入学生ということもあり、秋学期入学となる。そのため、秋学期の評価を先に行う。

春学期（表23、図19）、秋学期（表24、図20）に示しているとおおり、秋学期は入学して半年間は、初めての日本生活が始まり、受講意欲は極めて旺盛である。全ての項目において95%以上の肯定的評価となっている。日本の授業スタイルに慣れてきている様子も伺える。

春学期の満足度（肯定的評価）において、教員の授業に対する評価は高い。学生の受講意欲は旺盛である。全ての項目の肯定的評価は98%程度を超えている。学生の満足度は高い。入学選抜において学習意欲や進路の目標をしっかりと見極めた選抜の成果が入学時より確認できる。教員として個別指導を含め、日本語教育課程全教員で全学生の満足が得られるよう努力した結果である。

表 23 留学生 1年 春学期

	とても 思う	だいたい 思う	どちらとも 言えない	あまり 思わない	まったく 思わない	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	100%	0%	0%	0%	0%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	99%	0%	1%	0%	0%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	97%	0%	3%	0%	0%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	97%	1%	0%	0%	0%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	97%	1%	1%	0%	0%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	99%	0%	1%	0%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	99%	1%	0%	0%	0%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	97%	1%	0%	0%	0%	1%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	99%	0%	0%	0%	0%	1%
Q10 意欲的に取り組んだ	100%	0%	0%	0%	0%	0%
Q11 知識・技能が身についた	98%	2%	0%	0%	0%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	98%	2%	0%	0%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	100%	0%	0%	0%	0%	0%

表 24 留学生 1年 秋学期

	とても 思う	だいたい 思う	どちらとも 言えない	あまり 思わない	まったく 思わない	無 回 答
Q 1 この授業はわかりやすかった	95%	2%	2%	0%	0%	1%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	97%	1%	2%	0%	0%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	96%	2%	2%	0%	0%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	98%	0%	2%	0%	0%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	96%	2%	2%	0%	0%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	96%	2%	2%	0%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	96%	2%	1%	0%	1%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	93%	2%	2%	2%	1%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	96%	2%	2%	0%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	96%	1%	3%	0%	0%	0%
Q11 知識・技能が身についた	96%	1%	2%	0%	1%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	97%	1%	2%	0%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	92%	8%	0%	0%	0%	0%



図19 留学生1年（春学期満足度）

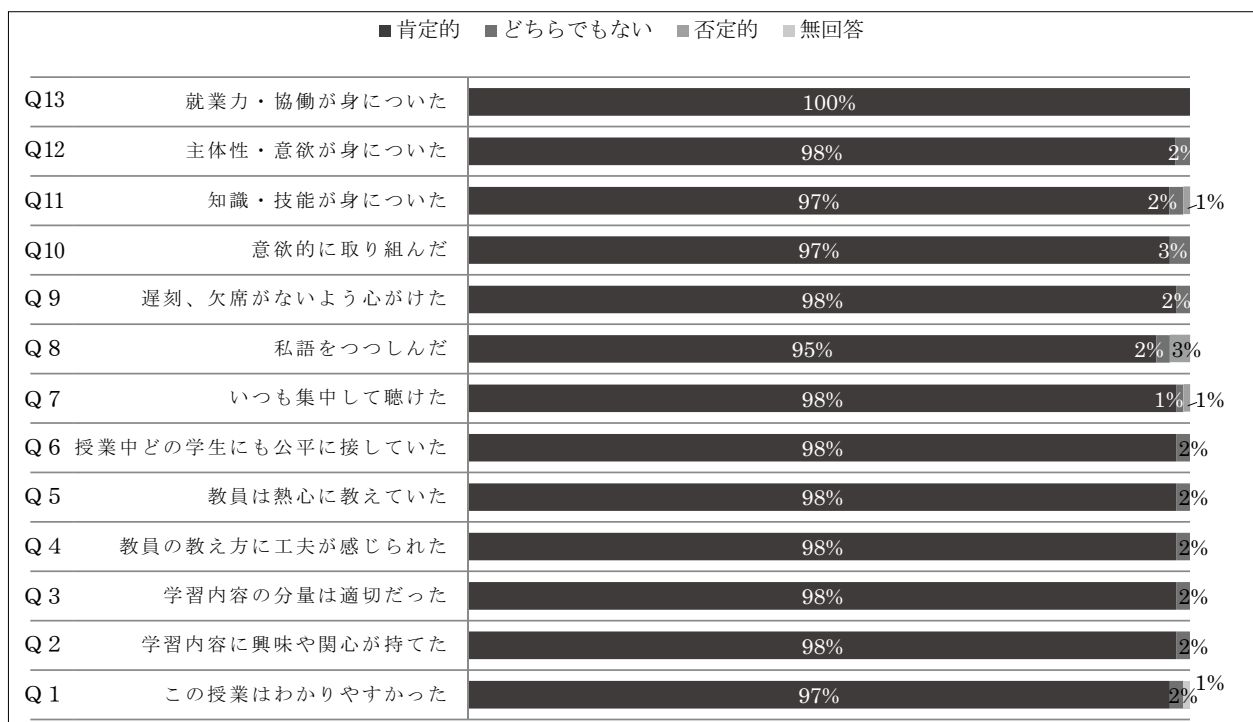


図20 留学生1年（秋学期満足度）

## 10. 留学生2年

春学期（表25、図21）、秋学期（表26、図22）に示しているとおり、秋学期の満足度（肯定的評価）において、教員の授業に対する評価はすこぶる高い。学生の受講意欲は旺盛である。全ての項目の肯定的評価は95%を超えている。学生の満足度は高い。ただし、数名の学生が授業についていけないものがある。教員として個別指導を含め、日本語教育課程全員で全学生の満足が得られるよう努力を期待したい。

春学期はこの秋学期のデータと異なる学生となる。1学年上の学生による評価であるが、1～2名の学生を除き、圧倒的に肯定的評価が出されている。授業に対する否定的評価はほとんど無いが、受講態度、意欲に数名の学生が否定的となっていることを教員は厳粛に受け止め、その理由、対策を検討していただきたい。ディプロマポリシーの達成はできており、自らの来日および自らの成長を実感できている教育は組織的に成功といえる。

表 25 留学生 2年 春学期

	とても 思う	だいたい 思う	どちらとも 言えない	あまり 思わない	まったく 思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	95%	3%	1%	1%	0%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	94%	4%	1%	0%	2%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	94%	3%	1%	1%	0%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	94%	4%	1%	0%	1%	1%
Q 5 教員は熱心に教えていた	95%	3%	1%	1%	0%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	95%	3%	1%	1%	0%	0%
Q 7 いつも集中して聴けた	95%	3%	1%	1%	0%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	93%	3%	1%	1%	2%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	95%	3%	1%	1%	0%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	95%	3%	0%	1%	0%	0%
Q11 知識・技能が身についた	96%	3%	1%	0%	0%	0%
Q12 主体性・意欲が身についた	94%	4%	1%	0%	0%	0%
Q13 就業力・協働が身についた	93%	5%	1%	1%	0%	0%

表 26 留学生 2年 秋学期

	とても 思う	だいたい 思う	どちらとも 言えない	あまり 思わない	まったく 思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	93%	3%	2%	1%	0%	0%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	95%	3%	0%	2%	1%	0%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	93%	3%	1%	2%	2%	0%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	94%	2%	0%	2%	2%	0%
Q 5 教員は熱心に教えていた	94%	3%	1%	1%	1%	0%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	95%	15%	15%	1%	0%	5%
Q 7 いつも集中して聴けた	91%	5%	0%	1%	1%	0%
Q 8 私語をつつしんだ	79%	7%	6%	5%	2%	0%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	88%	4%	1%	6%	1%	0%
Q10 意欲的に取り組んだ	87%	5%	0%	6%	2%	0%

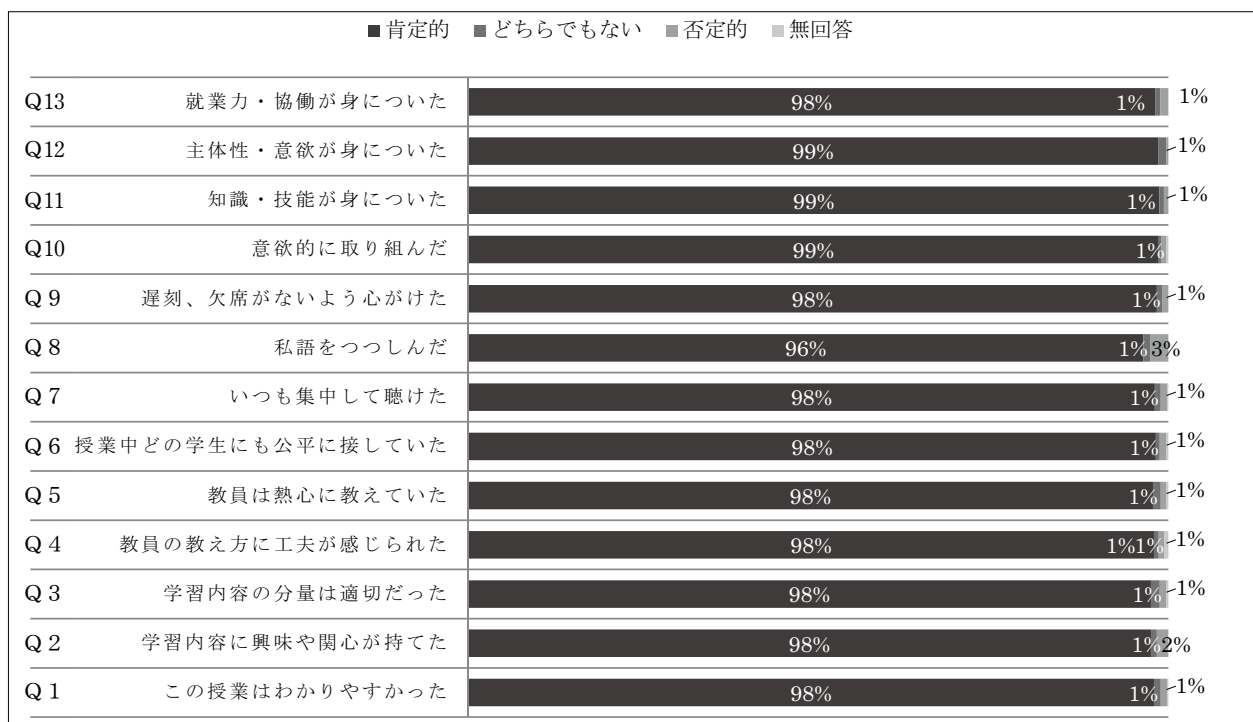


図21 留学生2年（春学期満足度）

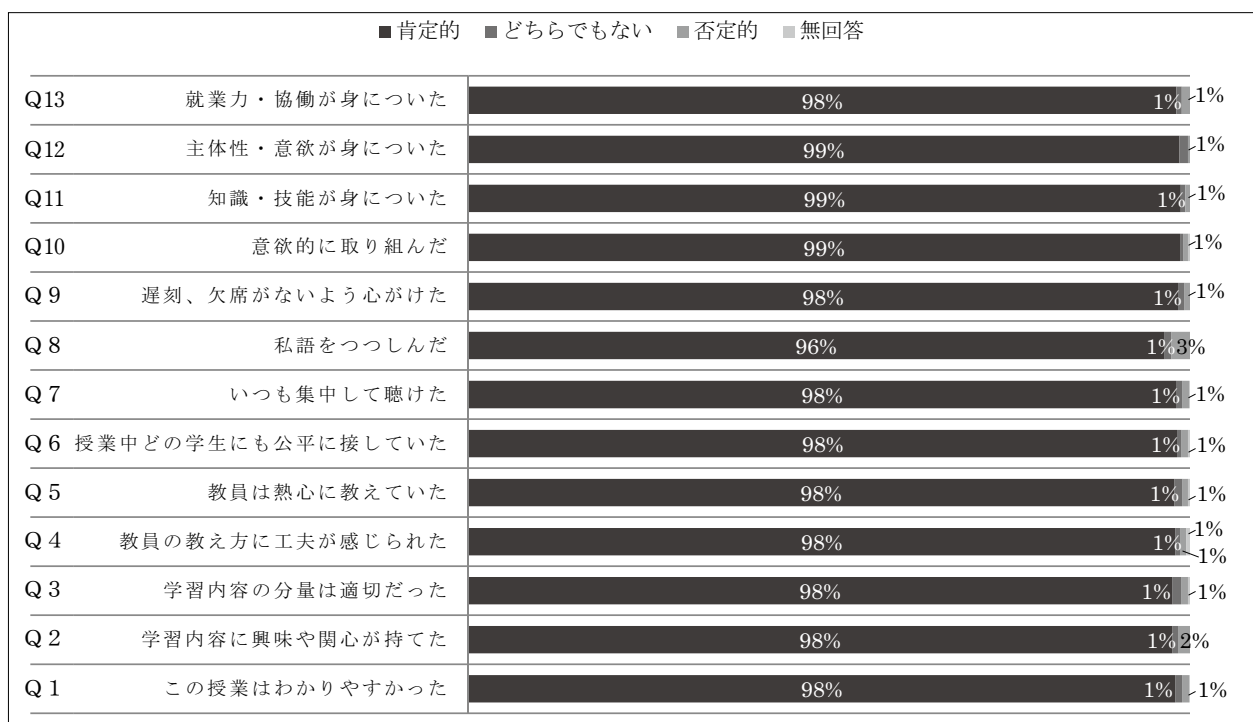


図22 留学生2年（秋学期満足度）

## おわりに

令和2年度の学生による授業評価を集計し、分析を試みた。学科の目指す免許・資格等により教育内容は異なる。それらの免許・資格取得を目指し入学してきた学生の個別の学力・能力も異なる。この状況の中、同じ基準で比較はできない。

しかし、学生の満足度を高めることは、学科による差は関係ない。全学科に共通した傾向としては、春学期の肯定的評価に比べ、秋学期の肯定的評価は高いことである。このことは教員の努力の賜と言える。

本学の建学の精神である「自立・自活できる人

材の育成」を達成するためには、入学してきた学生の将来の夢（職業・進学）をより具体的に明確に示していく中で、就業に必要な知識・スキルの修得が、日々の授業に直結していることを、学生に理解させていく中から生まれる。別府溝部学園短期大学は80%を超える授業でアクティブラーニングの要素を取り入れた授業を展開している。学生が積極的・能動的に授業に参加し、自ら考え、実践し体験学習を進めることを推進してきている。近年、学生の学力低下については全国的な問題となっている。本学の学生においてもこの状況は否定できない。しかし、2年後にはこの学生1人1人が「自立・自活」する人材となってくれなければ、本学の目標が達成されないだけでなく、地域の高等教育機関としての役割を果たしたことになる。そのため、入学前や入学後の補習授業を行う必要も検討しなければならない。教員が授業内容・方法の改善に叡智を絞り、指導力を向上させる組織的な取り組み（FD）も積極的に行う必要がある。個人の努力を求めつつ、組織的、継続的な努力が期待されている。

本学で、学生による授業評価を導入して22年が経過した。教員は授業に関するPDCAサイクルを理解し、真摯な態度で反省、分析、対策を立て、実践し、着実にその成果を挙げてきている。特に、Q5（教員は熱心に教えていた）の項目については、毎年、前・秋学期とも最上位の肯定的評価となっており、その他の教員側に関係する項目もほとんどが高い評価を得ている。使命感に溢れ、強い教育的愛情をもったきめ細かい指導は殆どの学生に好意的に受け止められている証である。

しかし、授業について行けない学生が少数ではあるが存在している事実も受け止めるべきである。冷静に自己評価して改善の途を模索し、学生の期待に応え得る資質能力を身に付けなければならないことはいうまでもない。授業公開等FD・SD研修の積極的な活動を推し進めることも、問題点の解決の一方策である。今回の学生による授業評価アンケート結果が、明日の明る

い途となることを期待する。

# 総合的な学習の時間で育む資質・能力に関する一考察 —小中学校学習指導要領改訂と実施状況等を通して—

三浦 徹夫

A consideration on the qualities and abilities nurtured in the time  
of comprehensive study  
—Through revision and implementation status of elementary and junior high  
school curriculum guidelines—

MIURA Tetsuo

## I. はじめに

2017(平成29)年小中学校学習指導要領が改訂された。今回の改訂では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「何を理解しているか(生きて働く「知識・技能」)」、「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」、「どのような社会・世界と関わり、より良い人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」とし、これら児童生徒たちに求められる資質・能力を社会と共有することの重要性を指摘している。さらには、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進を求めている。

総合的な学習の時間が小中学校学習指導要領に新設され23年が経過した。総合的な学習の時間のねらいは、各教科等で身に付けた知識・技能を関連付けたり、深めたりすることにより、児童生徒が知識・技能を総合的に働くようにすることである。学習指導要領の改訂のたびに、学校現場の苦悩が見え隠れする。つまり、理念が先行するものの、各学校の実践が追い付いていけないように見て取れる。

本研究では、総合的な学習の時間の指導における課題を明らかにしたい。そのため、総合的

な学習の時間が導入されてからの経緯とその間、全国の学校における実施状況等を見ていく。

## II. 総合的な学習の時間の概要

### 1. 学習指導要領の改訂に伴う総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の創設から、現在に至るまでの経緯を振り返り、実践的な課題を明らかにする。

#### 1) 総合的な学習の時間の創設

1996(平成8)年中央教育審議会答申において、これからの子供たちに必要となるのは、自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である。このような資質や能力を「生きる力」と呼び、その育成を図る柱として総合的な学習の時間が構想された。中教審答申を受けて、教育課程審議会は「各学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるよう裁量時間を確保すること、生きる力は全人格的な力であることを踏まえ、国際化や情報化をはじめ社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために教科等の枠を超えた横断的・総合的

な学習を円滑に実施するための時間を確保すること」とし、総合的な学習の時間については、各教科等のような目標や内容を明示することなく、この時間のねらい、教育課程上に授業時数とともに位置づけることにとどめた。つまり、総合的な学習の時間は「生きる力」の育成と「特色ある教育、特色ある学校づくり」という二つの期待を担って登場してきた。

## 2) 2008（平成20）年学習指導要領改訂

各教科と総合的な学習の時間との役割分担と連携が十分でないこと、活動のねらいや子供たちに育てたい力や学習活動の検討等の課題、さらには学力低下論を背景に、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育むため既存の教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習に加えて探究的な学習を目指すこととした。また、総合的な学習の時間で育てようとする資質や能力及び態度の視点として「学習方法に関すること、自分自身に関すること、他者や社会とのかかりに関すること」を例示した。併せて、学校段階間の取組の重複を改善するため、従前の学習活動として「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な学習、児童生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題」に加え、小学校では「地域の人々の暮らし、伝統と文化などの地域や学校の特色に応じた課題」、中学校では「職業や自己の将来に関する学習活動」を加えた。

このように、内容の取扱いについて改善を示したものの具体的な目標や内容は各学校において定めることを改めて確認した。

## 3) 2017（平成29）年学習指導要領改訂

総合的な学習の時間は、各学校が地域や児童生徒の実態等に応じて、教科等の枠を終えた横断的・総合的な学習及び探究的な学習や協働的な学習が重要であることとしてきた。文部科学省による全国学力・学習状況調査から総合的な学習の時間で探究的な学習経験のある児童生徒は各教科の正答率が高いこと、また、OECDが実施

した学習到達度調査（PISA）結果から、学習の姿勢の改善に貢献するものとして評価されるなどその意義が認められた。一方で、総合的な学習の時間で育む資質・能力や各教科等との関連性については学校間格差があること、探究のプロセスにおいて「整理・分析」「まとめ・表現」に対する取組が十分でないことが課題とされた。

今回の改訂では、総合的な学習の時間における学習を横断的・総合的な学習から探究的な学習に重点をおいた。

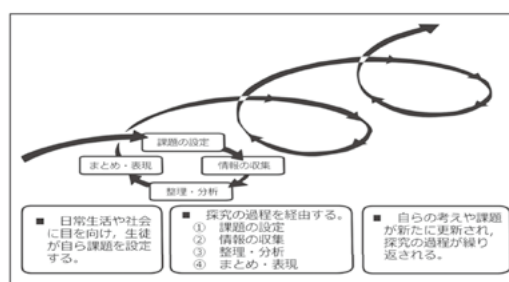


図1 探究的な学習における児童生徒の学習の姿

探究的な学習プロセスでは「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」が繰り返され、その過程で資質・能力が育成されると考えた。その資質・能力については、以下のような説明が添えられている。

### A. 総合的な学習の時間だからこそ獲得できる知識・技能等

総合的な学習の時間においては、教科書等に示された具体・個別的な事実だけではなく、取捨・選択し、実社会（実生活）における諸課題の解決に働く知識、概念が形成される。つまり、事実に基づく知識から汎用的に活用できる概念を獲得する学習と言える。

### B. 探究的な学習のよさを理解する

換言すれば、総合的な学習の時間で学んだことの有用性を実感できる、ということである。各教科等で身に付けた知識や技能、思考力、判断力、表現力等が自ら設定した課題解決に役立つことに気付く。そのことこそ、総合的な学習の時間が各教科等との関連性を児童生徒自らが見

通せることに他ならない。

### C. 主体的・協働的に取り組む探究的な学習の意義

総合的な学習の時間に主体的に取り組むこと、協働的に取り組むことにより、よりよい課題解決につながることを経験する。他の児童生徒と共に学ぶことにより、異なる意見に触れ、学習活動が発展したり、課題への意識が高まったりする。このような学習経験は、自他の尊重や他者と力を合わせたりすることの大切さなど学びに向かう力、人間性の育成が期待できる。

### 2. 総合的な学習の時間の実施状況

文部科学省が実施する「教育課程実施・編成状況調査」をもとに、全国の小中学校における総合的な学習の時間の実施状況をまとめた。図2は、2003（平成15）年度から2017（平成27）年度間、前述した「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な学習」の区分であらわしたものである。また、図3は、2018（平成30）年度における「横断的・総合的な学習」に加え「児童生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題」に基づく区分で表記したものである。

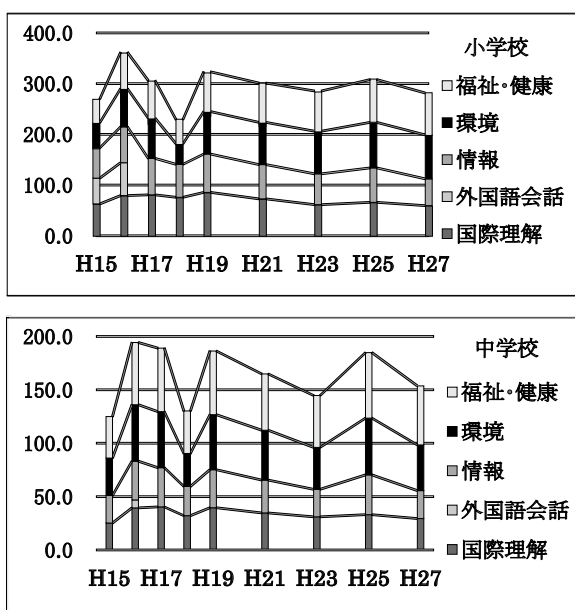


図2 全国小中学校における学習活動

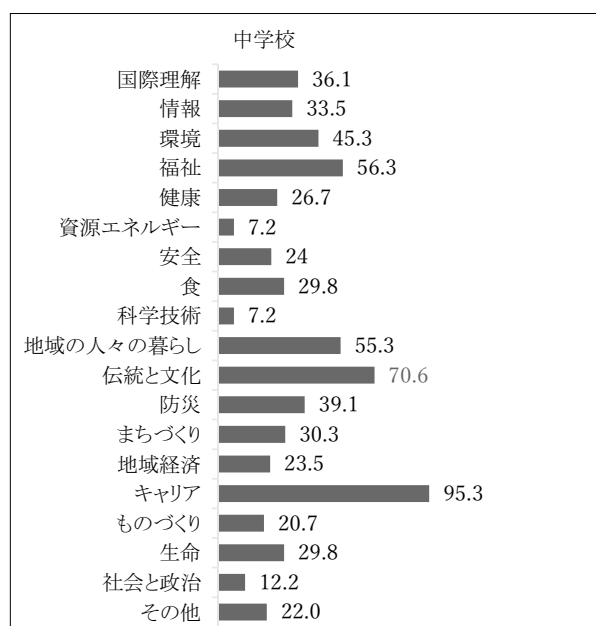
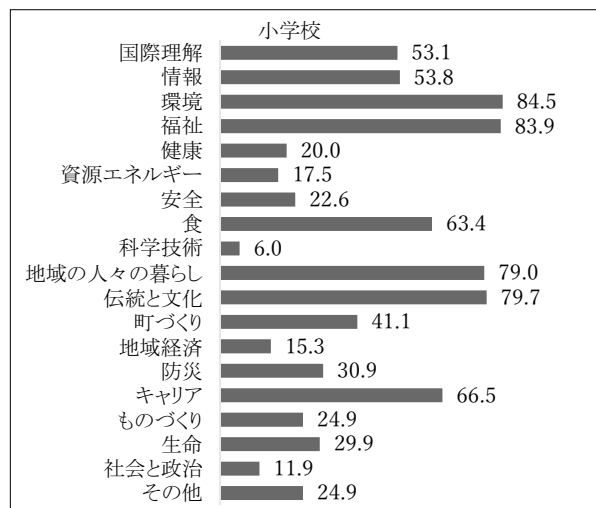


図3 全国小中学校における具体的学習内容 (H30)

図2から、全国の小中学校が実施してきた総合的な学習の時間では「福祉・健康、環境」に関する学習活動の実施率が高いことがわかる。図3からは、小学校では「食、地域の人々の暮らし、伝統と文化」など児童の身近な課題、中学校では「キャリア」といった進路指導に関する課題の実施率が高いことがわかる。ここで注目すべきことは、課題は異なるもののそれぞれの学習活動を通じて前述したような資質・能力が身に付いたかどうかである。

### Ⅲ. 総合的な学習の時間実施上の課題

学習指導要領の改訂に伴う総合的な学習の時間の取扱いと小中学校における実施状況を概観

し、課題をまとめてみる。

### 1. 目指す資質・能力とその学習活動を保障する授業時数の確保

2008（平成20）年学習指導要領では、教育課程上これまで総則の一部に含まれていた総合的な学習の時間は独立した章として記述されることになった。このことにより、総合的な学習の時間は教育課程上の位置づけが一層明確となり、学校教育における重要性が高まった。一方で、必修教科の授業時数増の結果、総合的な学習の時間は削減された。表1は、年間時数の変遷を示したものである。

表1 総合的な学習の時間の年間時数

学校段階	1998(平成10)	2008(平成20)	2017(平成29)
小学校3・4年	105	70	70
5・6年	110	50	70
中学校 1年	70-110	70	50
2年	70-105	70	70
3年	70-130	70	70

前述した総合的な学習の時間で育成される資質・能力は、探究のプロセスを繰り返すことで時間をかけながらじっくり養い育成してくものである。ここに、総合的な学習の時間の指導上の課題がある。つまり、総合的な学習の時間の意義は理解しつつも児童生徒に探究の学習を保障する授業時数が確保できない現実がある。

### 2. 総合的な学習の時間の学習評価

総合的な学習の時間の評価に当たっては、「学習活動及び各学校が自ら定めた評価の観点を記入した上で、それらの観点のうち、児童生徒の学習状況に顕著な事項がある場合などにその特徴を記入する等、児童生徒がどのような力が付いたかを文章で端的に記述する」としている。表2は、評価の観点及びその趣旨を示したものである。

表2 総合的な学習の時間の評価の観点及びその趣旨

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習の取り組み態度
趣旨	探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識や技術を身に付け、課題に関する概念を形成し、探究的な学習のよさを理解している。	実社会や実生活の中から問を見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析してまとめ・表現している。	探究的な学習に主体的・協働的に取り組もうとしているとともに、互いのよさを生かしながら積極的に社会に参画しようとしている。

通知表や指導要録に記された所見には、「調べの中で…についての新たな課題を発見することができ探究心が育っています」「調べたことを他の人たちにも上手に伝えることができコミュニケーション能力が育っています」「新聞のレイアウトを考える中、表現力も育ってきています」等の事例が散見される。懸念することは、やや定型文が目立つことである。年度当初、どのような教材を選択するかに相当な時間を費やしたものの評価段階においてどんな力が付いたのかに収束した感が歪めない。

### 3. 小中学校における指導上の課題

武田明典他が実施した総合的な学習の時間についての教員のニーズ調査によると、「指導計画の作成が難しい」、「指導の仕方が難しい」、「学校差が大きい」という項目において有意に小学校が高い一方、「目標や意識が理解されていない」、「評価の基準が難しい」、「授業内容が分散化」という項目で中学校の方が有意に高くなっていることから、小学校では授業の仕方に対する困難さが教員の意識に表れやすい一方、中学校の教員は授業を行うこと自体に対する困難さを示す肯定的な割合が高い。このことは、教科担任制の中学校の方が小学校に比べて、複数の教科を横断的・総合的に取り組む総合的な学習の時間の取組が難しいことを示唆している。さらに、経験年数別にみると、10年未満の場合、「指導の仕方が難しい」という回答で割合が有意に高くなっている一方で、10年以上の場合、「授業内容が分散化」、「児童生徒に役立っているか不明確」や「学校差が大きい」、「安全面の問題」といった項目でその割合が高くなっている。このことは、経験

年数が短い場合、指導の仕方などを意識する一方、経験年数が高くなるにつれて、学校全体でどのように取り組んでいかに意識が向くようになるのではないかと考察している。このような傾向は、筆者他が2007(平成19)年、大分県内の小中学校教諭1,718人を対象に総合的な学習の時間の実施の実態と課題について調査した結果と類似している。総じて言えば、学年集団ではなく学校集団として総合的な学習の時間で児童生徒にどんな力をつけるのか、そのためにどんな教材を選択するのか、系統的、計画的な取組が求められていると考える。

#### IV. おわりに

総合的な学習の時間が新設され今日までの学習指導要領改訂に伴う経緯と全国小中学校の学習実施状況等をもとに、指導上の課題について述べてきた。ここで思い出されることは、1989(平成元)年小学校学習指導要領に新設された生活科である。幼児教育から小学校教育への円滑な移行を図るとともに児童が主体的かつ総合的な活動を通して自立の基礎を養うことをねらいとした。学校現場では従来の社会科と理科との合科的な考え方から脱却できず戸惑いを生じたことが思い出される。しかし、現場からの問題点を修正しながらその趣旨や意義が浸透してきた経緯がある。総合的な学習の時間に関しては、学校間取組状況と学校段階間の取組の重複などが報告されており、まだ十分な教育効果を上げているとは言い難い。今後は、小中学校9年間を見通し総合的な学習の時間で目指す資質・能力を系統的に設計・実践することではないかと考える。

探究型総合学習の実践校として全国的に注目されている長野県伊那市立伊奈小学校の福田弘彦校長は、本校の教育実践を支える基調は「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力を持っている」という子ども観と「教師集団が互いに授業力を高めていく同僚性」にある、とコメントしている。

学生の卒業研究の指導に当たっている筆者が思うことは、テーマの設定に相当の時間を費や

すこと、各種情報の収集はできるもののその活用のための整理・分析、考察力、情報発信力に関して、総合的な学習の時間が果たす役割が極めて大きいことに気付かされる。目先の学びに埋没することなく将来の幸福度を見据えた教育改革が求められているとも言える。

#### V. 引用文献

- 1) 小中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 (平成 29 年 7 月)
- 2) 総合的な学習の時間の実施状況 (平成 15 ~ 25 年度 文部科学省)
- 3) 総合的な学習の時間についての教員のニーズ調査 (武田明典他 神田外語大学紀要 2018-03)
- 4) 総合的な学習の時間について (中央教育審議会教育課程部会生活・総合的な学習の時間WG 資料 3、4、5、7)
- 5) 総合的な学習の時間における実践的な課題ー探究的な学習をどのように進めるかー (橋谷由紀 日本体育大学大学院教育学科研究科紀要 第3巻第1号 2019 pp. 109-118)
- 6) 生活科の成立過程と現状ー総合的な学習の時間との関連を中心にー (波多野達二 京都教育大実践研究紀要 第11号 2011)
- 7) 総合的な学習の時間の実施の実態と課題 (軸丸勇士等 日本生活体験学習学会 平成 19 年 3 月)
- 8) 60 年通知表がない公立小の凄「探究型総合学習」 (toyokeizai.net/articles/-/468495)

